
ひととせ

S E T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひととせ

【Nコード】

N4502S

【作者名】

SET

【あらすじ】

廃部。残されたのは、選手ひとりと、マネージャーひとり。二年生の長谷川達吉と、三年生の真木美保の元野球部ふたりは、練習場所の確保にすら苦勞し、華々しい大会とは無縁の毎日を送る。お互いを野球バカと評する高校生の男女の一年。ひととせ 完結済み。

春

三月は、グラウンドの割り当てが週に一回だ。足先で味わうようにマウンドの土を均してから、軽く息を吸い込んだ。ピッチャープレートに両足を乗せ、そして振りかぶる。左手の指先に神経を集約させて、自分なりにベストのリリースポイントを意識しながら、球を放った。しかしボールは真木先輩の構えるキャッチャーミットの遙か上方、後ろに置いていた防護ネットのフレームに当たった。球の勢いが死に、地面にぼとりと落ちた。

「ノーコン」

吐き捨てるような言い方。彼女は水色のジャージの上に、キャッチャー用の防具をつけている。今残っている道具はすべて、引退した先輩たちが残していったものだ。

久しぶりのマウンドでの投球で力んでしまった、は言い訳にならない。黙って返球を受け取る。怒りを表すような強い返球だった。右手が痺れた。

「夏大の時みたいな球、放って見せてよ」

真木先輩は、そう言って、グラブを構え直した。

振りかぶり、足を踏ん張って、放る。しかしまた、防護ネット。

その次も。

真木先輩がキャッチャーマスクを額まで上げてマウンドに駆け寄ってくる。

「やっぱ、女相手だと、投げにくい？」

少し、寂しそうな言い方だった。週に一度のマウンド、それが防護ネット相手というのもあまりに味気ないだろうと、今日は真木先輩が自らキャッチャー役を買って出てくれた。

首を横に振る。尻ポケットに入っていたロジンバッグを左手で触り、口の前に持ってきて、息を吹きかけた。真木先輩は頷き、キャッチャーとしての定位置に戻った。

一週間ぶりの投球練習が嬉しくて、嬉しくて、ボールをコントロールできないだけだ。嬉しさは今の三球で吐き出した。俺は、軽くてなく、しっかりと息を吸い込んで、吐いた。今では少なくなりつつある、頭の上に腕を上げる正統派のワインドアップモーションから、投げ込んだ。今度は、上手く指先から離れた。真木先輩の構えるミットのと真ん中に、ボールが吸い込まれた。小気味のいい音がした後、ボールがグラブから零れ落ちた。

「いったあああ……」

真木先輩は左手を抑え、うずくまった。

マウンドを降りて近寄ろうとすると、地面を向いたまま、手で制された。

「へーき」

結局、三十二球を投げ込んだ所で、ホームプレートに膝をついた真木先輩が両手でバツを示した。真木先輩が、防具をつけたまま膝立ちでネットの後ろに移動してからは、俺ひとりでネットへ向けて百二十球を投げた。

先輩たちと一緒にいていた練習メニューは、真木先輩のメモを基に少しアレンジし、投球練習の前にこなしてあった。投げ込み後は、中学の頃からの習慣の体幹をやった。そのあと、真木先輩に手伝って貰い、体のストレッチとクールダウンを済ませてから上がった。今日も、顧問は来ない。先輩たちが引退してからは、一度顔を見せたきりだ。

ボールをプラスチックの箱に入れて、用具入れへ戻し、防護ネットを二人で運び、用具入れへ戻す。四つあるベースをそれぞれ二つずつ運ぶ。片付けの間中、何故か真木先輩はグラブをはめたままだった。疑問に思っただけと見ていると、視線に気づいた真木先輩が、苦笑いした。

「慣れようと思って」

そろりとグラブから引き抜かれた真木先輩の手は、用具入れの暗がりによく見えなかった。しかし、校舎から洩れる灯りの下に出た

時、見えた左手は、痛々しく腫れていた。慌てて謝ると、また苦笑い。

「いやいや、いいよ。達吉くんが練習してる間、冷やしといた。それに私、中学まで、男子に交じって野球やってたんだから。このくらい、慣れてる。でもあれだね。一年以上も離れると……硬球を相手にすると、ここまで違うんだね。怖いし痛いし」

俺と真木先輩は、いつものように、駐輪場で別れた。

去年の夏。この浦部第一高校に入学し、初めて迎えた夏の選手権大会地方予選。三年生部員が六人、二年生部員がゼロ、一年生部員が二人、顧問はいるが、監督はいない。そして一人を他の部活から借りたメンバーで出場した俺たちの高校は、くじ運にも恵まれ、一回戦、二回戦を突破した。俺はどちらの試合も一人で投げ抜き、三回戦も先発した。しかし古豪と称される三回戦の相手には全く歯が立たず、二十二対一と大差をつけられ、五回コールドで負けた。つまり、左腕という一種の特殊性が通用したのは、そこまでだったということだ。反吐を撒き散らす苦しい練習に打ち込んできた人間に對しては、左腕だろうが右腕だろうが、実力だけがものを言う。

入ったばかりの一年生に投手と四番のポジションを譲り、三番でファーストに入った入江先輩は、そんな大差のゲームでも声を出し続けていた。一回表、俺がワンナウトも取れずに五点を奪われた時も、マウンド上に向かって、常に声を出し続けていてくれた。その声掛けがなければ、もっと得点を重ねられていただろう。監督役もこなしていた入江先輩は、引退後も、よく練習相手になってくれ、投球フォームの改善点や変化球の使いどころなどを何度も話し合った。そんな入江先輩は、卒業して、もういない。遠く大阪の大学で一人暮らしをするそうだ。

三年生が居なくなると、それまで二人いたマネージャーも辞め、俺と同学年の部員も辞めた。つまり今の浦部第一高校野球部は、マネージャーは真木先輩一人、選手は俺一人。入江先輩、真木先輩と

協力して作り上げた今の投球フォーム、体も大きくなり増した球威で、どこまで通用するか。どうしても試したくて、他の部活を駆けずり回って試合に出てもらえないかと頼み込んだが、その部活部活の顧問と、硬球で怪我した際の責任の所在で揉めた。結局、クラスでよく一緒に居る三人しか、集められなかった。当然、地域の新人戦、秋の地方大会には不出場。

既に、来月、新入部員が入らなかったら、廃部になることが決まっている。今年高校に入る後輩にも声を掛けているが、反応は芳しくない。県立は私立と違い、併願できない。落ちたら、二次募集がある県立以外には絶対に入れない。せつかく受かった所で、まともな試合ができるかすら怪しい高校。高校で野球を続けるか決めかねている人間もいる中、野球を続けると決意している人間は、そんな場所で高校での野球を棒に振りたくはないだろう。

そして四月。二年生になった俺と、三年生になった真木先輩の必死の勧誘も虚しく、新入部員は、ゼロだった。

廃部。

廃部後、真木先輩との連名で、とりあえず同好会を立ち上げようとしたが、野球部は相当に嫌われていたらしく、誰も顧問になつてくれなかった。それまでの野球部の顧問ですら。

「私が一年生の頃、監督が、部員を暴行して大怪我をさせた暴力事件と、部内での暴力事件が同じ時期に起きてね。部内の暴力事件のほうは、当時の三年生が一年生に対して……つまり私の学年の何人かを手酷くやったの。それで私の学年の部員は全員辞めちゃって。教員でもあった監督は懲戒免職、野球部は半年間の対外試合禁止。二つの不祥事の対応でいろいろあったから、野球部は嫌われ者。もうあれから一年以上経ったし、達吉くんは、何も悪くないのにな……」

廃部後は、当然のように、グラウンドの使用許可は出なかった。部や同好会に所属していない人間に割り当てるスペースはない。正

論だった。

同好会づくりを手伝ってくれる真木先輩に、俺はことあることに礼を言った。真木先輩はことあるごとに、苦笑を零した。

「私は、野球が好きで、野球に関わっていたくて、マネージャーになったんだよ？ 自分の為にやってるんだから、お礼を言われる筋合いはない」

しかし四月いっぱい続けた抵抗も虚しく、五月に入り、一旦、学校での活動を諦めざるを得ない時が来た。要するに、嫌になった。野球以外の事で、ごちゃごちゃと患わされることに。いくら声をかけても、部員が集まらない。顧問になつてくれる人間もない。むしろしつこい顧問の要請を煙たがられ、一部の教諭たちには、全くの無視をされるようになった。

無意味なことに時間を割くなら、練習がしたい。

駐輪場の、いつも真木先輩が停めている場所の近くで、彼女が通りかかるのを待った。しばらくして、両耳にイヤホンをした真木先輩が、足もとのアスファルトを眺めながら、歩いてきた。声をかけたが、聞こえていないようだった。仕方なく、彼女の前に立ちふさがった。

「達吉くん。今帰り？」

イヤホンを両方外し、真木先輩は微笑んだ。

ここ最近、真木先輩の苦笑いしか見ていなかったの、たじろぐ羽目になった。真木先輩は、俺の横を通り、自転車を引っ張り出した。

「あんまり上手くないねえ。私なんか、成績の事まであげつらわれて……」

「先輩、諦めませんか」

言いにいく前、思い切つて言うと、真木先輩が笑みを消した。

「もちろん、掲示板とかを使って、部員の勧誘は続けますよ。けど、野球なんて、ボールとグローブあればできますし……。どうせやつ

ても無駄なら、練習、したいですし。先輩、受験生だし、これ以上、無駄なことにつき合わせたくないです」

一瞬、真木先輩の動きが止まった。

自分の為に使っている。口癖のように言われてきたことを今さら思い出し、俺は慌てて訂正しようとした。

「あ、違います、無駄じゃなくて」

「無駄。無駄かあ……」

訂正を入れる前に、今までに聞いたこともないくらい、冷たい声音。

「じゃあ、やめよう。今日限りで。掲示板のも全部剥がす。顧問を頼むのもやめよう。ああ、なんか、無駄なことに付き合わせてごめんね？ そっかあ、無駄だったんだ。全部、無駄？」

真木先輩は冷めた声のままそう呟き、自転車を押し始めた。訂正を言わずに先走る真木先輩に、少し苛立つ。

「待ってください。俺の話を」

「私も、明日、一緒に部員を勧誘するとき、切り出さなきゃ、って思ってた。でもそれは、ひどいよ。無駄は、ひどいよ。私、無駄だなんて思ったことなかった。達吉くんには……来年がある。ここで頑張っておけば、来年、先生たちの意見が変わるかもしれない。来年、野球をやる人たちに繋がればって思ってたから、私、ずっと、達吉くんの練習にだって、付き合ってきた……」

「先輩、そうじゃなくて、今のは」

先輩はイヤホンをつけ直すと、自転車のスタンドを蹴っ飛ばした。明らかに不必要な力が加わっている。

そのまま走り去っていく自転車を見つめながら、俺は溜息を吐いた。

気の抜けたボールを投げ込んだ時の返球などで、薄々気付いていたが、真木先輩は短気だ。沸点が低い。

翌朝、登校した時、学校の駐輪証明ステッカーの番号から、真木先輩の自転車を探した。カゴに、メモ用紙を入れる。

『無駄っていうのは、失言でした。ごめんなさい。でも先輩、すぐ謝ろうとしたのに、何も言わせないで帰る先輩も先輩だと思います』

帰り。俺の自転車のカゴにも、メモ用紙。細くて小さい字。

『ごめん。生活指導の小野田のせいで苛々してた。明日からまた練習付き合っから許してください』

夏

真木先輩はこのところ、放課後の教室で友人たちと一緒に勉強しているらしい。大学受験の対策で忙しいはずなのに、毎日顔を出し、夜八時を過ぎる練習後のストレッチにも、必ず付き合ってくれる。ときどき、投げ込み練習に付き合うため、

「勉強ばっかじゃ気が滅入るしね」

と言いながら、早めに来てくれることもある。俺の見えない所で練習しているのか、真木先輩のキャッチングは、春先よりも段違いに上手くなった。左手を痛がる素振りも減り、気持ちよく投げられる。

特別教室が集まっている校舎の裏。一般の民家に面しているそこは、夏だと言うのに日当たりも悪くじめじめしていて、好き好んで人が来る場所ではない。

そこで、俺たちは、練習を始めた。

部費も出ないなか、毎回どこかのグラウンドを借りているほど資金に余裕はない。グラウンドの使用許可が出なくても、要するに、見つからなければいい。日当たりが悪いなりに生い茂る雑草を真木先輩と協力して全て抜き去り、準備をした。一塁から二塁までの直線しか再現できなかった、ベース配置。多少、曲がれる余裕を持たせたから、かろうじてベースランニングの練習はできる。そこから間隔を空け、マウンドも設置した。さらにマウンドの十八・四四メートル先に、ホームベースと、防護ネット。勝手に持ち出したラインマーカーで引いたバッターボックス。

マウンドを作ったときは、園芸部からスコップを借り、周りの土を掘り返して、マウンドとなる場所に積み上げた。近くの水道から、教室の掃除用具入れにあったバケツを使って水を運び、その水とスコップで土を固めた。そんなお手製のマウンドは、グラウンドにかつてあった——今は平らに均されてしまった——マウンドよりも、

安定感に欠けていた。しかしそれでも、久しぶりのマウンドの感覚には興奮し、作り終えた日は、防護ネット相手にかなりの球数を投げ込んだ覚えがある。

マウンドを作り終えてから二ヶ月以上が経った今日も、ナイター設備どころか夜灯すらもない、校舎裏の薄暗い空間での練習に、真木先輩は付き合ってくれた。

「おつかれさま」

更衣室がないので、着替えは、備品を覆うために買ってきた、青いビニールシートの上。そこでいつものように制服のズボンに履き替えてすぐ、真木先輩はスポーツドリンクを渡してくれた。最初の頃こそ、真木先輩は気まずそうに目を逸らし、俺も何だか申し訳なさを感じていたが、今ではお互いに慣れた。

投球練習に付き合う時はジャージ姿の真木先輩も、更衣室がないのは、同じ。けれど彼女は、半袖のＴシャツの上にブラウスを羽織って、学校指定のハーフパンツの上にスカートを履くだけでいい。それからハーフパンツを脱げば、もう帰り支度だ。

「今日やってるのは中日対巨人だよ」

「へえ。先発は誰ですか？」

「ローテ通りだと山本昌対西村かなあ……。四番のブランコは東京ドームと相性いいからね。打線爆発が楽しみ」

「どうせ、外めの変化球で釣られて終わりですよ。三振、ショート併殺、三振、レフトフライ」

「あ、いま、ブランコを馬鹿にしたな？ 忘れちゃいけないのは西村にそんなコントロールがあるかってことだよ」

「球威がありますからね。高めでも釣れます」

俺はどちらかという巨人びいき。真木先輩は、本拠地のナゴヤドームへ応援に行ってしまうほどの中日ファン。

「けど、今から帰っても終盤しか見れなくないですか？」

「日曜に、ノートパソコンで予約録画する方法を親戚のおじさんに教えてもらったの。明日から学校に持ってきて観るんだー。あ、ち

やんとイヤホンつけるから練習の邪魔にはならないよ」

「明日は、イヤホンつけないでください。俺の予想が外れてないか確かめたいので」

「よし、じゃあ、四打席当てるのは流石に厳しいから、ブランコが三振するかしないかで、予想」

「絶対、三振します」

最近はある程度、碎けて話が出来るようになった。真木先輩も、苦笑いだけでなく、くると表情を変えてくれるようになった。入江先輩が居たところには、入江先輩と真木先輩が心底楽しそうに話をしていた。二人は付き合っている、というのが他の三年生部員の間での共通認識だった。そのこともあり、どこか二人の会話に割って入るのを遠慮していた俺は、ときどき振られた話に応える程度で、真木先輩個人とは、それほど話したことがなかった。

話すようになって分かったのは、真木先輩は本当に野球が好きだということ。練習の休憩中に話すことも、プロ野球の試合結果や、スポーツ新聞などで仕入れた選手同士の逸話、近場の高校のエースピッチャーの噂、より効率のいい練習方法、とにかく野球に関連することばかり。

「わかった。何賭ける？」

「え、賭けるんですか」

「当然」

「分かりました。俺が勝ったら、スポーツドリンク十日分で」

「遠慮なしだね。じゃあ私が勝ったら……」

真木先輩は、唇に右手の小指をあてて考えている。

「後で考える」

「なんか、怖いですね。まあ、ブランコは一日一善的なノリで三振するから、俺が負けることはまずないでしょうけど」

それからしばらく黙って歩き、いつものように、駐輪場で別れた。翌日の真木先輩は、宣言通り、ノートパソコンを鞆に入れて持ってきた。充電は済ませてあるそうで、録画してある映像が終わるく

らいまでなら持つという。

第一打席。短距離ダッシュを繰り返して肩で息をしている最中に聞こえてきた実況によれば、結果はフォアボール。ピッチャーは西村。

第二打席。五十メートルの距離を決められた時間内に往復する”十キロシャトルラン”。真木先輩が考案したそのサディスティックな練習を、息も絶え絶えにこなしている最中、またフォアボール。ピッチャーは西村。

第三打席。防護ネットのすぐ近くでボールを投げこみ、投球フォームの意識付けを行っていると、レフトスタンドへのホームランを告げる実況の声。ピッチャーは野間口。

第四打席。真木先輩が容赦ないスピードで上げる正確なトスを、バットで打ち込んでいるとき、元プロの解説者は、簡単にショートへの併殺打に終わったブランコに苦言を呈していた。ピッチャーはマイケル中村。

試合終了。六対一で中日の勝利。

「ブランコ、大活躍でしたね。一打点、三得点か」

練習を終え、駐輪場まで歩く。

「私の勝ちだね」

「で、俺は何をすれば」

「私とデートして」

「え？」

思わず、隣の真木先輩を見遣る。入江先輩とはどうなったんですか、と言い掛けると、真木先輩はいたずらっぽく笑った。

「冗談だよ。今度の土曜、夏大の予選、一緒に見に行こ。入場料は学生二百円だから、それを達吉くんにおごってもらいます」

前日に選んでおいた服に着替えて、待ち合わせ場所の、市民球場前。

十分くらい余裕をもって行っただが、真木先輩の方が早かった。真

木先輩は、くすんだ白色を基調にした袖なしチュニツクに、膝下まである黒のレギンスの上下だった。レギンスにかかる部分は、フリルっぽい生地のスカーツ状。被っているキャップには、サーベルに貫かれたシャレコウベ。黒のカバーで覆われた細長い棒状のカバーを、コンクリートの上に置き、右手で抱き留めている。

「お、時間前行動。感心だね」

「そのでかい荷物、何ですか？」

「ああ、これ？ ビデオ用の三脚。他校でマネージャーやってる子に、見に行くなら録ってきてって頼まれたの。あ、入場券、買っておいた」

真木先輩は三脚を抱えたまま器用に手を動かすと、バッグから入場券を取り出した。俺もポケットから財布を出し、四百円を払った。ブランドコを軽んじた罰だ。

「持ちましようか？」

「いいの？ ありがとう、お願いね」

入場券を受け取るついでに、三脚の入ったカバーも受け取った。

「先輩、早いですね」

「家が近いから。あと、今は学校の外だから、先輩じゃなくて、真木さん」

「じゃあ、真木さん。中に入りますか」

真木さんは満足げに頷き、先に立って歩き始めた。

俺は市民球場の煤けた外観を、大した物珍しさもなく見回した後、真木さんの背に視線を落ち着けた。チュニツクの背中は大きく開いていて、細めの紐がクロスしている。そこにかかる髪の間隙から覗くのは、健康的な浅焼け。少しどきりとした。入江先輩の彼女、入江先輩の彼女、と言い聞かせ、髪に視線を固定する。

肌もきれいだけど、髪もやっぱり……。

「いいとこが空いてる。あそこにしよ」

俺は慌てて視線を球場内へ向けた。

応援団以外にも、ぼつりぼつりと人は入っているが、内野の、審

判の真後ろに近い席は空いていた。真木さんがそこを指差した。

俺はなるべく真木さんのことを見ないようにして、小さな階段を下りて行った。六つある横並びの座席、その左から三番目に座った真木さんは左端に座り、左から二番目の席に荷物を置いた。俺は三脚を足元に置く。他は財布と携帯電話をポケットに入れているだけなので、そのままグラウンドで行われている最終的な整備を眺めた。「神西、去年はベスト16で止まったけど、今年も強いよ。達吉くんは、自分が出ない大会なんて、見たくもないだろうけど……。我慢してね。絶対、その悔しさを無駄にはさせないから」

真木さんが、呟いた。俺は黙って頷いておいた。

一塁側には、多野、三塁側には、神西が陣取り、試合前の円陣を組んでいる。神西は、去年の俺が……二十二失点を喫した相手。神西は相変わらず、全校生徒と野球専門の応援団、そして吹奏楽部を引き連れてきていた。あのとき、俺の高校は誰も来てはいなかった。その日が平日だったこともあるが、試合後、いることが分かったのは、入江先輩の母親と、真木さんの母親だけだった。地方大会の三回戦なんて、もともと観に来る人も少ないが、それでも、悲しくなるほどにアウェーだった。

去年の出来事のはずなのに、そのときの、球場全体が俺一人を嘲笑い、憐れんでいるような感覚は、なかなか忘れられない。ベンチに戻るときに聞こえた「どうせ負けんなら早く終わらせろよ」「あのピッチャー、ゴミじゃん」という声も耳の奥底に蘇るような気がした。多野を応援しようという心に決め、黙って試合開始を待った。ただ、多野のことは、同じ地区の公立高校だということしか知らない。双方のベンチから、掛け声とともに選手が飛び出した。互いの対戦相手と、審判に対して帽子を取って挨拶。グラウンドとベンチにそれぞれが散って行った。

一回表の神西の攻撃はもう、去年の出来事を再現しているような印象だった。とにかく、容赦のないタコ殴り。九番打者に満塁ホームランを打たれ、マウンドの上でがっくりと肩を落としている投手

が、去年の俺と重なった。その投手に対して、フィールド上の選手が、ベンチの選手が、激励の声を出す。まだまだ、これから。神西の応援に掻き消され気味なその声だったが、グラウンドレベルの雰囲気は悪くなさそうだ。入江先輩の姿も浮かんた。

一回表の攻撃がどうにか七点で収まった所で、軽く息を吐いて左を見た。気付けば真木さんは、三脚を立ててビデオカメラで試合を撮っていた。膝の上にはノートパソコン。キーボードを叩いてスコアを記録している。

「いつの間に」

「え、試合始まってからずっと」

「気付きませんでした」

「かなり入り込んでたんだね。その気持ち、刻みつけときなよ」

真木さんは、微かに笑った。

俺と真木さんは、それから、神西が二十対五、五回コールドで多野を下すまで、黙って試合を見続けた。

そして帰り際、真木さんの提案で、近くのファストフード店に寄っていくことになった。試合が終わったのが十一時半で、店に付いたのは五分くらい後。昼時の多種多様な人の彩りで、中は雑然としていた。クーラーが寒いくらいに効いた店内に入ったおかげで汗は止まった。

「達吉くん、大丈夫？　ここに来るまで、ちょっとふらふらしてたけど」

奥まった二人掛けの席に座る。真木さんが三脚を壁に立て掛けながら言う。

「大丈夫です」

「帽子、かぶってないせいだと思う。観戦だからって油断してたでしょ」

「野球帽以外、持っていないです」

「本当に？　しょうがないなあ、今度、調節可能なの、持ってきてあげるよ。これは気に入ってるからあげないけどね」

真木さんは笑い、キャップを取った。俺は席から立った。

「じゃあ、俺、注文してきますね」

「あ、私が」

俺は立ち上がろうとする先輩を制して、レジに並んだ。

「チーズバーガーセット二つ。飲み物はどっちもオレンジジュースで。氷は抜いてください」

ストックがあったのか、レジで会計をしている間に、注文した商品を、他の店員がトレイに並べていく。財布をしまい、何気なく真木さんのほうを見遣った。携帯用の鏡を手に持った真木さんも俺を見ていて、目が合った。真木さんはすぐに視線を逸らした。たぶん俺も、同じように。

……なんか、知らない人と目が合ったときより、気まずかったな、いま。

「取ってきました。待たないで済みましたね」

「後で半分払うから」

真木さんはそう言うのと、早速、ポテトを手にとった。ひとつのトレイを分け合って、それぞれのポテトを食べる。真木さんは、食べている間は喋らない人のようで、黙々とポテトを消化していく。俺もそれにつられて、黙々と。微妙な間だったけれど、不思議と、焦って話題を探さなくてもよかった。真木さんとぼんやり目を合わせたり、周りに座っている人たちを眺めたり、トレイに敷いてある広告を読んだり。気付けば、俺たちより先に食事を始めていた周りの人間の誰よりも早く、食べ終わっていた。

「真木さん、食べるときは無口になるんですね」

ご飯を食べている間は黙る。それだけのことで、学校では見られない、新しい一面を見つけたような気がして、なぜだか少し、嬉しい。

「あ、ごめん……。私、ご飯食べ終わった後に喋る方が楽だから。親から聞いたんだけど、小さい頃、飲みこまないうちから喋って、口からぼろぼろこぼして、それはそれは汚らしい食べ方だったらし

いよ。それで親が、食事のマナーの中でもそこを重点的にしつけて、食事中は無口に」

口をペーパーナプキンで拭き、苦笑い。

「達吉くんは、平気？」

「はい。別に、慌てて話すこともないです」

「そっか。よかった。私の知り合いは、黙つてると、慌てたように話題を探す人が多いから。私はそんなに気にならないけど、やっぱり、黙つて食べてると気まずいのかな」

「そうですね。変な間になる感じはします」

お互いにオレンジジュースをすすりながら、他愛もない話を続けた。

外で見る真木さんは落ち着いていて、いつもよりも、笑顔や口数が目に見えて少なかった。

時折、愚痴を零す時に見せる冷めた目が、意外だった。学校では多少、取り繕っている部分があるのかもしれない。それとも、好きな野球が関わってくると、気分が高揚して笑顔が多くなるのか。

俺も元々、口数の多い方じゃない。それほど会話が盛り上がることもなく、昼食は終わった。真木さんは最後に、自分の分の食事代金を支払ってくれた。

もっと、話題を考えてくれば良かった。

つまらない休日にしたかな、と思いながら店を出る。俺と真木さんは帰り路が逆方向。他の歩行者の邪魔にならない所まで歩いて立ち止まった。

「今日はありがとう」

「いや、俺も、神西戦は見たかったんで。それに、学校の外で会うのも新鮮で楽しかったです」

「私も、楽しかったよ」

真木さんは笑んでくれた。

本当だろうか。

「納得してないね。本当だよ。私、学校では元気がいいキャラって

思われてて、少し、それに当てはめられて見られるのが……息苦しくなる時があるんだ。別に、特にみんなと違うってわけじゃないのに。でも、達吉くんは……」

また少し、冷めた目つきで、話した。そして、その途中で、真木さんは、言葉を切った。

「あ、ごめん、今の、忘れて。じゃあ、また練習でね」

真木さんは苦笑い交じりに軽く手を振り、俺とは逆方向に歩いて行った。

夏休みに入り、整備の際に根こそぎ刈ったはずの特別校舎裏の雑草も、元気を取り戻しつつある。

夏休みが始まってから三日が経った昼。俺は一時的に練習を中断し、家から持ってきていたゴミ袋を広げ、一本一本地道に抜いていた。受験を控え、早速、塾の夏期講習に通い詰めている真木さんに、雑草を抜くから学校に来てくれ、とはさすがに言い出せなかった。

刈り取れば早いかもしれないが、根っこごと抜かないと、また、すぐに生えてくる。炎天下の中、一人で、ひたすら、雑草と向き合い、抜くだけ。ただそれだけのことから、精神的に、きつい。本当は、太陽が校舎裏に届かない、朝のうちにやるつもりだったけれど、太陽のない間にちよつと練習しようとしたら、やめるタイミングを逸して、結局、いつもの昼休憩の時間まで練習をしてしまった。球を投げる左手の指を蚊に刺されたりしたら、変な癖がついてしまつので、軍手を三枚重ねてはめ、虫よけスプレーもしつかり吹きかけた。たまにスプレーをかけ直し、そしてまた雑草を抜く。夏場のユニフォームは、上は半袖だが、ズボンは年中そのまま。そのせいで体温が上がってしょうがないのに、軍手の三枚重ねも加わる。叫んで軍手を取って、ユニフォームも、何もかもを脱ぎ捨てたくなる。身体を滴り落ちる汗の量が多すぎて、水を頭からかぶったようにも感じる。それだけ水分が流れ出ているのに、日に焼ける肌はしつかり痛い。

「だああ！」

まだ半分以上残っている雑草と目が合い、苛立ちが口から洩れた。両手に握っていた雑草を地面に投げつけ、立ち上がった。終わる気がしない。

一旦、休憩。校舎裏の、コンクリートで作られた広い出っ張りに座った。後ろ手をついて、空を見上げる。太陽とまともに目が合い、眩んだ。黒に近い紫色の斑点が、視界の大半を覆った。目を何度も瞬かせながら、手探りで、すぐ近くにあるクーラーボックスに手をかけた。家で凍らせてきたペットボトルのうちの一本を取り、首にあてる。

しばらく目を閉じ、痛いほどの冷氣に浸っていると、手に何かが触れ、ペットボトルが俺の手から引き抜かれた。驚いてすぐに目を向ける。なびく灰色のスカートと、ふとももが目の前にあった。視線をあげた。

「練習したあとに、これだけの雑草を抜こうとするなんて信じられない。こういうときこそ、マネージャー、呼びなよ」

真木さんは呆れたように言った。そしてペットボトルを自分の首筋にあてて気持ち良さそうに目を閉じた。

「雑草くらいで呼ぶのは、申し訳ないです」

「後でスケジュール渡す。夏期講習ない時は、だいたい、見に来る予定だから。してほしいことがあったらメールして」

制服に身を包んだ真木さんの顔にも、汗が滲んでいる。ふだんと違い、白いブラウスのボタンが二つ外れていて、肌がちらつく。タイも締まっていけないし、ベストも着ていない。汗で張り付いたブラウスから、水色の下着が透けて見えている。

「真木さん、それ、もう一つボタン閉めたほうがいいですよ。蚊に刺されます」

俺は、足元の雑草に目を向けた。

「えー、開けてると少しは涼しくなるんだけどなあ」

文句を言いつつも、ボタンを閉めたようだった。

「ベストは持つてきてないんですか」

「暑くて着てらんない」

真木さんは、ペットボトルを俺に返した。そして地面に飛び降り、雑草を抜き始めた。きつと、ジャージも、持つてきていないんだろう。夏場の真木さんは無防備過ぎて、嫌になる。

「真木さん」

俺はそう呼びかけた。虫よけスプレーをポケットから取り出して、振り向いた彼女に放り、地面に降りた。

秋

六時限目の終了を告げるチャイムが鳴り、クラス全体から溜息が洩れた。

中間テストが近く、駆け足で黒板に書きなぐる英語教師に、ついていくのが精いっぱいだった。連日の練習のせいで、と言いたところだけれど、練習のせいにしていたら、人一倍練習し、成績もよかった入江先輩は説明がつかない。

「明日の午後は校内校外一斉清掃です。勝手に帰ったら明後日の朝、校内放送で職員室まで呼び出します」

掃除のために椅子を机に載せていると、担任が丁寧な言葉遣いの割に厳しい目つきで、クラスの中を見渡していた。背中に聞きながら、一番後ろまで机を押す。

同じく教室掃除担当の男子から箒とちりとりを受け取り、協力して隅から隅までざっと掃いて中央に寄せた。今度は黒板担当以外の全員で机を前に寄せ、同じ要領で掃いた。そして机を元に戻し、終わり。

ユニフォームやグローブが入った四角くかさばる鞆を担ぎ、

「いつまでもダレてんなよ」

今日の練習メニューをマネージャーから教えてもらったあと、机の上にうつ伏せになった、陸上部の宮川の背中を軽く叩いた。

「しょうがねえ。行くか」

三階にある教室から、階段へ。

「秋の大会は集まりそうか？」

「無理。部ですらないから」

「そっか。来年に期待だな。でもまあいいじゃん、可愛いマネと二人きりで練習とか」

「お前、真木さんのこと知らねえだろ」

「達吉の話にときどき出てくるけど、その話だけでも可愛い感じが

する」

人でごった返す階段をだらだら下り昇降口、そこで上履きからスニーカーに履きかえ、部室棟まで歩く。

「真木さん、最近はおーっとしてるときが多いんだよね。声かけるとすごいびっくりされるし」

「進路のことで悩みでもあるのか？」

「そうかも」

「相談に乗ってあげれば？」

「俺が？」

「お前が」

「俺が乗ったってしょうがないだろ」

「なーに言ってるんだよ。お前は野球バカだから、練習さえできればそんなん気にしねえだろうけどさ……。普通だったら、男女二人の部活なんて、気まずくって日が沈むまでなんてやってらんねえよ」

部室棟と、特別教室の入った校舎との境目で、宮川は足を止めた。いつもそれぞれの部活に散る場所だ。

「例えば、俺が藤枝さんと二人きりのところ、想像してみろよ。マネと選手なんて、同じ部活に携わってるってだけで、俺と藤枝さんくらいの……。クラスメートの距離間よりちよつと近いくらいだろ？」

二人で黙々と準備とか、片づけとか、練習メニュー調整とか、世間話とか……。俺なら二人になったその日で音上げる自信があるね。けどお前と真木さんは違う。むしろうまく行ってるみたいだしな。そつから考えると……」

「お前さ、立ち話してる余裕あんの？ グラウンドにもうみんな出てきてるっばいけど」

俺は建物の隙間から微かに見えるグラウンドに、陸上部員が用具を運んでいるのを認め、顎でしゃくった。

「うあ、マジか！ えーっと、結論言っと、そのマネさんはお前のこと、部活の可愛い後輩、なんてくくりじゃ説明つかない感情を持つてるかもしれないから、相談に乗ったら喜んでくれんじゃね？」

つてこと。じゃ、急ぐから、また明日な」

「結論も長えよ」

俺はそう呟いて、踵を返した。部室棟へ向かっていく生徒がほとんどで、歩けば歩くほど人の気配がなくなった。

真木さんも俺と同じ人間だと言ったら、宮川は納得するだろうか。宮川に説明する暇がなかったが、真木さんはとにかく野球が好きでしょうがない人だ。たった二人でも諦め悪く活動を続けているから、周りから見ればそういう関係に見えるのかもしれない。けれど、俺が、練習のせいで、真木さんと二人きりでも意識している暇がないのと同じように、真木さんも、大好きな野球に関わっていられるのなら、後輩と二人きりだろうが関係ない人だと思う。

それに、入江先輩のこともある。

特別棟裏の練習場にたどり着くまでに、急ピッチで感情の防波堤を建て直した俺は、真木さんがまだ来ていないのを確認して軽く息を吐き、ユニフォームに着替えた。

ウォームアップをしていると、真木さんが恒例の謎の歌を口ずさみながら姿を現した。

「おはよー」

「ちわす」

「今日も頑張ろうね」

真木さんはそう言って、無断練習場の端にある机に、歩み寄った。あの机は、夏休み明け、真木さんが教師に無断で、特別棟の倉庫から引っ張りだしてきたものだ。机には、家から持ってきたという簡易スタンドライトが備え付けられている。真木さんは机の脇の取っかかりに鞆をかけ、勉強道具を広げていく。

「いつも気になるんですけど、その鼻歌、真木さんのオリジナルですか？」

「んーん。違うよ。実在するバンドの歌」

「バンドですか」

「うん。四人ともそれぞれが個性的でね。だから音楽性をすり合わ

せるのが大変そうだけど、他の三人がいるから良い音楽になつて
る。達吉くんも、一人では野球はできないんだから、仲間がいなく
ていいなんて思っちゃだめだよ」

「俺は別に一人が好きじゃありません。部員が入らなかっただけ
「へへへ……」。知ってるよ。達吉くん、野球やつてるときは本当に
険しい顔してるから、知ってても、あえて一人でやつてるとかど錯
覚しそうになるんだよ」

「あえて一人で練習するのが好きなんて、求道者ですか、俺は」

「来年、部員集め、頑張つてね。絶対、九人集めて」

「それは高望みでしょう。四人入れば、俺の友達以外に一人集める
だけで試合に出れます」

「四人……。そっか、こんな状況なんだから、何も常識にこだわら
必要はないんだ」

真木さんはそこでペンを一度回した。

朝練と、一時限から四時限の授業をこなして、昼休み。俺は宮川
と一つの机を分けあって、弁当を食べた。矢島と橋本はテニス部の
ミーティングのあと、部の連中と一緒に食べるらしい。

クラスの女子が、肌を見せずにうまいことジャージへと着替えて
いる。いつも同じように着替える真木さんを思い出していると、携
帯電話の無料ウェブゲームで遊んでいた宮川が、顔を上げた。

「そっか、先輩の相談に乗ってみたか？」

「乗ってない」

「聞いてみりゃいいじゃん。最近元気ないですねー、って」

「野球以外のことはほとんど話さないから、きっかけがない」

「チキンが」

「なんでそうなる」

俺の言葉を見無視して、宮川はロッカーにジャージを取りに行った。
俺も自分の鞆から取り出し、手早く着替えた。男女別の更衣室なん
て贅沢なオプションは、この県立高校にはついていない。

宮川が着替え終わるまで待つてから、校庭に出た。今日は出席名簿順でいくつかのグループに分かれ、校内校外の一斉清掃日だそう。そんなことをしている暇があるなら練習に向かいたいが、勝手に帰って呼び出されたら面倒なので、仕方なく参加することにした。俺は名字が長谷川で、名簿の近い前田と宮川、藤枝と同グループ。いつも放課後の掃除をしているメンバーより、二人少ない。掃除場所とは特別棟周辺。他の人間に、ビニルシートのかかった備品を見られなくなかったので、担任に頼んで変えてもらった。

宮川と一緒に特別棟の入り口に行くと、既に前田が竹箒で玄関先を掃いていた。

「遅いよ」

前田が少しイライラした様子で言った。

「ごめん、前田さん。ゆっくりしすぎた」

「長谷川くんはいいんだよ。どうせ、宮川くんのせいで遅れたんだろうから」

「酷くねえ、それ？」

「信用の差だよ。じゃあ、片方は窓拭きお願いね。もう、藤枝さんがやってくれるから。もう片方は私と掃き掃除」

「じゃあ、俺が窓やつてくる。藤枝さん、手が届かない所がありそうだから」

特別棟入口の窓は、普段から用務員さんが掃除してくれているのか、大して汚れてはいなかった。庇が出っ張っているので、雨粒の跡もない。

そこで、藤枝がスプレータイプの洗剤を窓に吹きかけている。見たところ百五十あるかないかの藤枝は、上の方に手が届いていない。「俺、やるよ」

藤枝の手から、力を抑えて、洗剤を引き抜いた。

「あ、長谷川くん」

俺はそれなりに身長が高く、それなりに腕も長い。楽に吹きかける事が出来た。藤枝から雑巾を受け取り、割合綺麗に保たれている

ガラスに、汚れの目立つ雑巾を押し当てる。特に会話もなしに、藤枝は下半分、俺は上半分、という役割分担が自然とできた。洗剤の跡がついて、何枚かあるガラスは次々に汚くなっていく。

「なんか、やるだけ無駄って感じだね」

「俺も思った」

しゃがんで隅の方を拭いている藤枝は、苦笑いでこちらを見上げた。上のほうの隅を拭いていた俺も、苦笑いで返す。

藤枝の方が先に、内側のガラスまで拭き終えた。視線を感じて振り向くと、藤枝は傘立ての骨組みの上に座って、俺を見ていた。

「長谷川くんって、野球やってるよね？」

「ああ、うん」

俺は適当に最後の仕上げをして、雑巾を玄関口のコンクリートの上に放った。

「ふうん。じゃあ、やつぱり、長谷川くんか。美保さんと一緒に野球やってる人は」

美保は確か、真木さんの下の名前だ。フルネームを初めて知ったのは、春の部員集めで、アドレスを交換した時だった。未だに、練習や野球以外の話題に触れたことはない。……触れるのが怖い、と言った方が正確かもしれない。真木さんと野球以外の話をしようとするたび、入江先輩とのが頭に過ぎる。入江先輩と付き合っているなら、今まで通り、接することができる。けれど、付き合っていない場合は。きつと、気持ちが抑えられなくなる。

「真木さんのこと、知ってるの？ 藤枝さん」

「塾で一緒なんだ。私ね、プロ野球選手名鑑を毎年買っちゃうくらいには野球が好きで……。今年の夏期講習で、美保さんが、高校野球の雑誌を広げてるのを見つけて、隣に座ってみたの。制服がうちのだったし、友だちになれたら楽しそうだったから」

「へえ」

学校の外でも、野球の雑誌、読んでるのか。野球バカにもほどがある。

あの人は本当に野球が好きなんだな……。

「美保さんと話していると、本当に楽しい。詳しく引かれそうだから、野球のこと、学校ではあんまり話さないようにしてるんだけど、美保さんは私より詳しいから気兼ねする必要ないし。その美保さんが、時々、ぼろつと零すんだ、長谷川くんとの練習のこと。うちの野球部は廃部になったはずなのに、何で、部があるみたいに話すのかなーって不思議に思ってた。美保さんはいつも『その野球やつてる子が』とかで話して、名前言わないから、この間、ちゃんと名前聞いたの。そしたら、タツヨシくん、って返ってきてね。それですぐ、長谷川くんだって分かって……」

「よく俺と繋がったね。確かに、達吉って名前は、あんまり聞かないけど」

「筋肉のつき方とか、手のマメのでき方とか、投手みたいだなあつて、普段から見ても、思ってたから」

「そんなに、分かりやすい？ あんまり、そういうの、目立たないと思うけど……」

「あれ、私、いま、かなり気持ち悪いこと言った？ まあ、どうでもいいじゃない、それは」

藤枝は照れ笑い交じりに手を振り、言葉を遮った。

「美保さん、褒めてたよ。私以上の野球バカとか、練習しか興味がない変人とか」

「それ、褒め言葉じゃないよ」

「ちゃんとしたことも言ってたけど……美保さんの許可がないと、教えられないなあ」

藤枝はくすりと笑った。気になる。何、言ってたんだろ。

「頑張つてね。来年は絶対、良い年になるよ」

俺は、黙々と練習していることが報われた気がして、

「ありがとう。藤枝さんも、ソフト部の練習、頑張つて」

藤枝は嬉しそうに頷き、傘立てから腰を上げ、雑巾と洗剤を拾った。玄関先に出て前田に声をかけた。俺も後を追った。

前田が言うには、校舎の裏手の雑草も、抜かないとならないらしい。

「俺、この校舎の裏で練習してるから。雑草は定期的に抜いてる」
めんどーだねと言いつつ藤枝と前田に、教えた。宮川は前に覗きに来たことがあるので、もう知っている。

前田が、俺の肩を叩いた。

「よくやった、長谷川くん。じゃあさつさと帰ろう、みんな」

「最後の確認まで残ってないと呼び出しだけど？」

「あれ。そうだっけ。でも呼び出しくらいいいじゃん。四人とも帰れば……」

箒に顎をくつつけている前田が、俺の方を見て、言葉を切った。

わけのわからない虫を口に突っ込まれた顔をした。

振り向くと、百八十四ある俺よりも高い長躯に、柄の悪い目つきをくつつけた教師が歩いてくる所だった。生活指導の、小野田。サッカー部の鬼監督としても知られ、特に優等生ばかりというわけでもないこの学校でも、彼に反抗しようという人間はいない。格好つける為に反抗して見せるのと、あの強面を更に怒らせることのほうを比べたら、後者の方がより面倒だからだ。

「何やってんだお前ら。ちゃんと掃除しろ」

「してます」

前田が、澄ました声で切り返す。

「どこがだ」

小野田が不愉快そうに声を大きくした。

「いえ、あの、終わったんです、指定された所は、一通り」

藤枝が、小さな声で、付け加える。

「確かここの担当は、玄関の掃除と、校舎裏の整備、だったな。玄関は……」

小野田が玄関先に向かった。四人ともしばらく無言で、小野田が掃除場所をチェックするのを見つめた。

「大丈夫だな。あとは校舎裏か」

まずい。

「あ、大丈夫です。もう終わってるんで」

「終わったなら、抜いた雑草はどうした？ ゴミ置き場にはまだ、雑草の入った袋なんて運びこまれていなかったが？」

小野田が意地悪く笑った。小野田は、しつこく野球部を立て直そうとしていた俺のことを、毛嫌いしている。真木さんによると、野球部の暴力事件の影響を受けて、サッカー部へも、疑惑の目が向けられたからだそうだ。

「見せてもらっぞ」

仕方ない。備品にはビニールシートが被せてあるし、うまくいけば、見逃してくれるかもしれない。それに、ここで事を荒立てれば、こんなくだらない掃除のせいで、他の三人の内申点にまで影響する。「わりい、フオローできなかった」

近づいてきた宮川が申し訳なさそうに、囁いた。

「大丈夫だよ。これ、俺の問題だし」

小野田は校舎裏に着くなり、立ち止まった。

「なんだ。綺麗じゃないか」

拍子抜けした声音でそう呟いたあと、小野田は校舎裏から出っ張っているコンクリートの部分に首を向けた。

そこでは、ジャージ姿の真木さんが膝の上にノートパソコンを載せ、イヤホンを耳につけ、画面を見つめていた。全体清掃は一年、二年だけ。三年は早期帰宅で受験勉強、ということになっていた。

「真木、こんなところで何やってる」

イヤホンを外してこちらを見た真木さんが、気だるげにこちらを見、固まった。

「こんなところで何をしてると聞いてるんだ。三年は部活も引退してるはずだろう、早く帰って勉強しろ」

「あ、いやあ、ここ、誰も来ないから、一人で過ごすのにつってっけで」

「机まで勝手に持ち出しやがって……お前は、いつもいつも、何な

んだ。お前に比べたら、茶髪やピアスのほうがまだマシだ」

真木さんは、春先、俺に対してよく見せた、あの苦笑いをした。

「このビニールシートはなんだ？」

「それは、別に、大したものじゃ」

小野田は、すぐ近くにある、マウンドに被せられた青のビニールシートに手を掛けた。

「待って」

真木さんが、パソコンを放ってこちらへ走ってくる。途中で、ビニールシートが舞い上がった。

俺はマウンドから目を逸らした。

「他の三人は表に戻っていいぞ。元野球部二人は残れ」

三人とも、俺を見た。俺は、大丈夫、というニュアンスを込めて軽く苦笑いしてみせた。真木さんの、まね。

三人が戻るのを確認したあと、小野田は、備品にかけられたビニールシートをめくっていった。最後に、防護ネットにかぶさっていたビニールシートをめくりあげた。

「ここで怪我した人間が居たらどうするつもりだった？ 練習中に、たまたま覗いたら、硬球が顔に当たった。重体になった。そのときいったい誰が責任を取る？」

「ボールは、防護ネットに向けて、投げたり、打ったりするだけです。万が一、ボールが逸れても、その後は、壁になるように配置してあります」

「お前は硬球の危険性を分かってねえんだ！」

小野田は、防護ネットのフレームを蹴っ飛ばし、マウンドに戻ってきた。

「で」

と、小野田が言った。

「これも一体、どういう了見だ。学校内にこんなもの、無許可で作りやがって」

小野田がマウンドを、蹴りつけた。砂が巻き上がる。倒された防

護ネットがその砂の向こうに見えた。入江先輩たちから、部を託されて、受け継いだ備品。部がなくなってから今日まで、真木さんと二人で、いろいろな練習を行ってきた、大切な、備品だった。

「その上から、どけ」

沸点の低いはずの真木さんよりも先に、俺は、そう呟いていた。

俯いていた真木さんが、弾かれたように顔を上げた。

「今、なんつった？」

「そこからどけて言っただですよ、先生」

胸ぐらを掴まばかりの勢いで、小野田が近づいてくる。しかし小野田は決して、体罰はしない。野球部の前例が身に沁みているからだ。

「いい度胸してんな、てめえ」

「教師がそんな言葉遣いしていいんですか」

「生意気言っじゃねえか。俺が体罰はしない、と思ってるからか」
「はい」

言った直後、ジャージの襟元を掻きあわされ、引っ張り上げられた。首が締めまり、一瞬、息ができなくなった。

「馬鹿が。お前は片親だろうが。体罰をしないのは、両親が居て、どっちもそれなりに口うるさい人間だった時の話だ。お前みたいに母親の出来が悪くて、奨学金でどうにか授業料払ってる人間は、対象外なんだよ」

「やめて、先生」

こわばった顔をした真木さんが、小野田の腕にすがりついた。

「お前は引っ込んでろ」

小野田が、左手を俺から離し、その手で、真木さんの頭を掴み、地面へ向けて勢いよく押し飛ばした。真木さんが、マウンドに足を取られ、受け身も取れずに、背中を地面に打ちつけた。真木さんは痛そうに目を閉じ、眉根を寄せた。

俺は小野田の右腕を、左手で掴み、思い切り爪を食いこませた。小野田が顔をしかめて腕を離す。俺は少しよろめいた後、体勢を立

て直し、利き腕の左、ボールを投げるときに使う左拳を、小野田に向けて振りかぶった。

「やめろ！」

そこで怒鳴り声。上半身を起こした真木さんだった。その声が、一瞬にして真っ白になった頭に、冷静さを運び込んでくれた。俺は動きを止めた。

避けようとも、防ごうともせず、立ったままだった小野田が、笑った。

「惜しかったな。退学まであと一步。停学、一ヶ月」

いいように挑発されたのだ、と気付いたときにはもう、小野田は、校舎裏を後にしていた。

「バカ達吉」

マウンドにへたりこんだ真木さんが、ぼつりと、言った。そうです、ね、と心の中で同意した。

その後、小野田から事を引き継いだ担任に自宅謹慎を命じられ、夕方、担任から改めて電話を受けた。職員会議の結果、教師へ殴りかかるうとしたことは問題だが、実際に殴ったわけではないことを勘案され、とりあえずは、停学十日で済むことになったと伝えられた。停学期間中は中間テスト期間とも重なるが、それを全て欠席することになった。原因が停学のため追試も行われず、全教科が零点扱いになる、ということだった。反省文を原稿用紙二十枚分書いて持ってきたさい、とも言われた。

職場から帰宅した母に話すと、とにかく叱られた。あまりの怒りように、持病の高血圧が悪化してしまうのではないかと気遣ったら、余計に怒られた。母の事を馬鹿にされたから殴りかかった、という状況なら反論して大喧嘩になったかもしれないが、実際には、真木さんが突き飛ばされたことも、引き金だった。

互いに無言の夕食を食べ終え、少し食休みしたあと、外を走ってくる、と言って家を出た。

信号や横断歩道、車が通る道を避けるようにしてとにかく全力で走った。何キロ走ったとか、何時間走った、とかは覚えてない。冬を感じさせる冷たい風に、喉を焼きつかせながら、とにかく、走った。そして汚水の流れる側溝に吐瀉物をぶちまけた所で、走るのをやめた。

そこからは、歩いて家に帰った。

母親に苦勞をかけない程度に勉強はするが、野球以外の事は、今、俺の中では重要じゃない。それなのに、自分から面倒を増やした。何であのくらいのことで、頭に血が上ったのか、分からない。真木さんの短気がうつったんだろうか。

それにしても、二十枚か。ごめんなさいを二十行書いて、それを二十枚……じゃあさすがに、駄目だよな。

「馬鹿みてえ」

「そうだよ、馬鹿だよ」

独り言のつもりで呟き、アパートの郵便受けを覗いたとき、後ろから声がした。

「うわ」

真木さん。

「何、その、うわ、って。せつかく様子を見に来てあげた先輩に向かって失礼じゃない？」

「いつからそこに。ていうか、家、どうして」

「さあ、いつからかな。住所は野球部があったところの名簿。とりあえず、これ」

アパートの入口の夜灯に照らされた真木さんは、学校用のサブバツグから、ボールを取り出した。

「あげる。備品、全部処分されたけど、一つだけ、無事だったから全部、処分、ですか」

「一斉清掃なんかで部が完全に潰されるなんてね。冗談みたい。真悟に申し訳ないなあ、本当……」

真悟は、入江先輩の名前。胸がきりきりした。

真木さんは手首だけを動かして、ボールを俺の方に投げた。俺は左手でそれを掴んだ。真木さんが何度も修繕してくれ、使ってきたボールのひとつ。真木さんの表情は、いつになく険しい。駐輪場で軽い口喧嘩になった時よりも、ずっと。

「達吉くん。私、今日の達吉くんには、がっかりした。一人なのに、一日も練習休まないで、手を抜かないで、野球ばかりやって、面白い後輩だとは思ってたけど、少し挑発されたくらいで、すぐに暴力を振るおうとする後輩だとは、思ってたかった」

胸の痛みが、増した。

「備品が見つかったくらいだったら、処分なんてされなかったかもしれない。真悟とか、他の先輩とか、もっともつと前から、大切にうちの野球部で使ってきた備品を……。全部、取られるなんてことは、なかったかもしれないだよ？」

この一年、練習を続けてきた俺の目標は、入江先輩だった。ボール球とストライクの見極めが下手で、明らかに見逃し三振なのに、フォアボールだと思つて一塁に走っていく先輩。俺が「三振です！」と怒鳴ると、照れ笑いでベンチに戻ってくる先輩。そんな一面もある入江先輩が、練習中は私語をせず、黙々と野球に向き合うその姿を見て、俺は、この高校に入って良かったと思えた。決して腐らず、この高校で、三年間をやり抜くことを決めたのは、入江先輩がいたからだ。

けれど、いま、真木さんが、親しげにその名前を呼ぶと、どうしようもない、苛立ちが沸き上がってくる。

「なら、先輩は、一斉清掃って聞いて、何かしましたか？ 三年生は、先に帰っていいことになってましたよね。その間に、備品を別の場所に移すとか、できたんじゃないですか」

「備品が見つかったことが悪いなんて言っていない。達吉くんが小野田を殴るうとして、備品が没収になって、停学になったことを責めるの」

「俺が悪いんですか？」

「小野田を殴ろうとしたことはね」

「けど、大切な備品を足蹴にして、母の事を馬鹿にして、真木さんまで突き飛ばしたんですよ、小野田は」

「だから、違うよ、そういうことが言いたいんじゃないってさあ……」
急に歯切れの悪くなった真木さんは、口を尖らせて俺から目を逸らした。

アパートの二階から洩れる光が、ここまで届いていた。真木さんの視線の先は、アパートの端にある、庇のついた駐輪場。そこには、真木さんの自転車と、俺の自転車、並んで置いてあった。苛立ちのぶつけどころがなくなり、気持ちが静まっていく。

真木さんはなかなか続きの言葉を発しなかった。俺は真木さんの横顔や、自転車の車輪をじっと見つめたり、アパート二階の自室を見上げたりした。居間は電気が点いていて、バラエティ番組の笑い声が洩れてきている。

無茶なランニングの疲れが足に来ていて、立っているのが辛くなってきた。帰ろうか迷い始めた時、ようやく、真木さんが続きの言葉を吐いた。

「達吉くんが退学になってたら、私は残りの高校生活、受験だけしかすることがなくなってたんだよ。そんなの、つまんないよ」

小さな、呟き。

「俺がいなくなつて、友達がいるじゃないですか。それに入江先輩とも、まだ続いてるみたいですし」

「続いてる？ 何が？」

「入江先輩との、付き合い」

真木さんが、ぽかんと口を開けた。そのあとすぐ我に返り、くすくす笑いながら、側頭部の髪を掻きあげ、耳にかける素振りをした。
「えーとね。達吉くん。それは、先輩たちに騙されたんだよ」

「は？」

今度は俺が口を開ける番だった。

「真悟と私は、小学校からの知り合いってだけ。学年は違うけど、

地区ごとの集団登校の時、ずっとグループが一緒だね。要するに、ただの幼馴染。何回も言ってるのに、先輩たちは、『ただの幼馴染は相手の事を下の名前で呼んだりしません！』とか、ふざけて、からかってきて……。例の暴力事件のせいで同学年の部員はいなかったし、実害もないから、放っておいたんだけど」

「そう、ですか」

さっきの俺は、真悟、と親しげに呼ぶ真木さんを見て、勝手に勘違いして嫉妬して、苛々していた。なんだか恥ずかしくなってきた。顔が熱くなった。

「ああ、でも、勘違いしてたなら、納得。達吉くん、私と、野球以外の話、ほとんどしないよね。私が日常的な話題に変えようとする、強引に捻じ曲げるんだもん。あれ、真悟に義理立てしてたんだ。変なところで律儀だなあ」

「わ、悪いですか？ 俺、入江先輩のこと、ホントに尊敬してるんです」

「私と話したくないだけかと思ってたよ」

「それはいいです。話したいです、知りたいです、真木さんのこと。もっと、いろいろ……」

焦って訂正した俺は、驚いたような真木さんの視線に気づき、更に焦った。今のは、直接的に言いすぎた。

「や、変な意味はないっすよ。部活の先輩として」

真木さんがまた、小さく笑った。真木さんは右手小指を唇にあてた。下唇をなぞったり、引っ掻いたり、小指はせわしなく動く。

「停学中、様子、見に来てあげるから。これからの練習の事は、明日、まとめて話すね。実はもう、目処はつけてあるんだ」

冬（最終話）

「今日も、多野で、練習？」

五時間目と六時間目の間の休み時間、一人でぼうつと窓の外を見ていると、右の方で声がした。見ると、藤枝だった。藤枝は、俺の目の前の席に座った。教室の一番左端、一番前の席。その席の女子は、他の女子と喋っていて、今はいない。

「ああ。練習」

「大変だね」

「好きでやってるから」

藤枝が茶化すように笑った。

「かーっこいい」

「いまは藤枝のほうか、練習、きついだろ。ソフトボール部全国選抜大会出場！ って横断幕、校舎にぶら下がってる」

「私はかるうじて、ベンチ入りだけだね。練習にはどうにか、へばりついてくしかない」

「その体のどこにそんな体力が」

「あ、ひど。チビって言った」

「言ってない」

「何いちゃついてんだよ、お前らは」

宮川が、藤枝の隣の席に座った。隣といっても、間には広めのスペースが空いている。

「聞いて、ミヤちゃん。この男は私の身長を嘲笑ったんだよ。自分が大きいからって」

「相変わらず失礼だな、達吉は」

「だよー」

藤枝が、嬉しそうに宮川を見る。そして、宮川と、雑談に興じ始めた。

……どう見ても、お前らの方がいちゃついてるけどな。

俺はまた、窓の外に視線を移した。体格的に恵まれていない藤枝は、死に物狂いで、ベンチ入りメンバーに入った。宮川だって、普段はだるそうにしているが、陸上に関しては本当にまじめだ。二人には、負けてもらえない。

野球部の備品がすべて処分されてから、俺は、同地区の公立校、多野高校の野球部に、合同練習という形で参加させてもらっている。多野という地名が表す通り、多野高校は、平坦な道や田んぼに延々と取り囲まれている。俺の学校から多野までは、自転車で片道三十五分の距離。授業が終わったらずに駐輪場へ向かい、自転車に飛び乗り、一秒でも早く練習に合流できるようにする。そして練習後は、一時間ペダルを漕ぎ続け、帰宅するのが日課だ。今までから三十五分、帰宅の時間が遅れたただだったが、睡眠時間がそのぶん減り、慣れるまでは、なかなか辛かった。

多野は、夏に真木さんと試合を見に行ったとき、神西にコールド負けをしていたチーム。真木さんはその時、ベンチの雰囲気の良いと、割と近場にあるという点で多野に目をつけた。多野の監督は頭の柔らかい人格者で、俺と真木さんで訪ねて行った初めての交渉で、すんなり受け入れてくれた。

ただ、十二月一日から三月八日までのオフシーズン中は、他校との合同練習や練習試合は原則禁じられている。そのため、多野に迷惑がかからないよう、その点を事前に高校野球連盟に確認した。どの部活にも所属していない俺の問い合わせは、極めて特殊な部類に入るそう、高野連の管轄対象外だそうだ。問題ないんですね、と念を押すと、管轄の対象外です、と返ってきた。素直に問題ないと言えいいのに、余計な火の粉が降りかからないよう、管轄の対象外、とわざわざ言い換えるあたりが、お役所的な対応だった。

管轄外、という頼りない結果を多野の監督に告げたが、監督はそれでも、応諾してくれた。おかげで俺は、停学期間中にも体を鈍らせることなく、野球の練習を続けることが出来た。ただ、中間テス

トは全て零点扱いになったので、勉強にあてる時間は、増やさなければならなかったが。

初めの頃は、多野の部員との距離感も掴みかねていた。それは、部外者が一人だけ混じることになった、部員側にも言えただろう。しかし実戦形式の守備練習でマウンドに上ったとき、多野の不動のレギュラー、一番でショートを守っている北島を三球三振に仕留めてから、周りの見る目が変わった。

「いい球放るなあ、長谷川。これで一人でやってるとか、確かに勿体ねえわ」

そう話しかけてきた北島をきっかけに、少しずつ、話す相手が増えていった。

入江先輩が卒業してから、真木さんは良くしてくれたが、ただ一人の選手として野球を続けてきた俺は、緩慢なプレーをして監督に叱られることや、多野の正捕手、里美さとみにアドバイスをもらうといったことが、いちいち嬉しかった。

多野で練習できるアイディアを与えてくれた真木さんの自宅は、浦部第一よりも、多野のほうに近い。受験が終わってからよく、練習を見に来てくれる。真木さんが来た日は、ただ真木さんがいるというだけで、練習に熱が入った。

「ネットのニュースで読んだんだ。人数が九人に満たない高校が、他の高校との合同練習で実戦形式の練習をしてるっていう記事。多野は別に困ってないけど、達吉くんの球を見たら絶対、受け容れてくれると思ってた。レベルの高い選手が入ると、刺激されて全体の底上げができるかもしれないから。オフシーズン中の合同練習が禁止って話は、達吉くんに合同練習の提案をしてから知って、血の気が引いたけどね」

合同練習を思い付いた理由を聞くと、そう答えた真木さんは、第一志望の私立大学に合格した。そこは首都圏の大学リーグの一部に参加している野球強豪校で、そこでも、マネージャーをやるかもしれない、と言っている。高校で既に奨学金を活用している俺は、就

職するつもりだったが、その言葉を聞いて、ぐらついた。停学の後から始めた勉強が予想以上にはかどっていて、国公立を、狙えるかもしれないからだ。母親がフルタイムで働き始めたので、それに無利子奨学金を上乗せできれば、大学には通える。

大学リーグの強豪相手に、自分の力がどれほど通用するのか試してみたい気持ちも、ある。それに……卒業のぎりぎりまで練習に付き合ってくれている真木さんとの繋がりや、断ちたくない。近いところで、野球がしたい。

「練習試合の解禁日が、近づいているが……。なんとあの神西から、練習試合を組んでくれないかと連絡が入った。夏にはベスト4、秋季大会でも、優勝した誠新に一点差で負けてベスト4の、あの神西からだぞ。夏に当たった時のことをあっちの監督さんが覚えてくれていて、お前たちが試合に臨む姿勢を、今のチームに見習わせたいという話だった」

練習前に集合をかけた監督が、嬉しそうに言った。

「そこでだ。先発には、長谷川を起用しようと思ってる」

「え」

驚きのあまり、監督の話の途中で声を上げてしまった。

「松林の肩の怪我が、長引きそうなんだ。代わりに控えの桂も考えたが、去年の主戦だった倉ですら、コールドに持ち込まれた相手だ。桂にとっては厳しい言い方になってしまいが……。まだ一年で、おまけに、本職が外野手の桂では、試合にならないと判断した。そこで、長谷川がいいんじゃないかと思いついてな。高野連、それに松林と桂にはもう、許諾を貰っている。先方にも話を通した。お前が懸命に練習をしているのを、見込んでの話だ。どうだ、長谷川。投げてみないか」

「投げます」

願ってもない言葉に、被せ気味に答えた。監督は頷いた。

「よし。練習の成果をぶつけられるようにしておけ」

「ありがとうございます！」

俺は監督に対し、深く、深く頭を下げた。

今日は祝日で、練習時間もいつもより長かった。その間、真木さんはアスリートの栄養管理に関する、難しそうな本を読んで時間を潰していたようだった。三月の月上旬は、暦の上では春めいているが、気温が真冬よりも厳しいときがある。昼休憩のときに挨拶に行き、カイロを渡しておいた。

帰り際。すっかり日が落ちて暗くなったグラウンドの隅のベンチで、真木さんがひとり、ぼうつと地面を見つめて、咳き込んでいた。何か考え込んでいるように見えた。

宮川にせっつかれ、悩みがないのか、何度か、問い質した。しかし結局、はぐらかされるままに月日が過ぎ去り、受験が終わった。受験が終わっても、真木さんが物思いにふける回数は減らなかった。進路のことではないらしい。家庭環境の悩みだろうか。

「風邪気味なんですか？」

真木さんはイヤホンをつけている。大きめの声で話しかけると、真木さんはびくりと肩を震わせた後、座っていたベンチの上に立ち上がった。部屋でくつろいでいたら、ゴキブリが近くを通ったから思わず机の上に乗った、という感じた。

驚いているつもりなのか、それで。俺は堪え切れずに笑った。

「びつくりしたあ。いきなり話しかけないでよ」

ベンチに土足で立ったままの真木さんは、俺を見下ろしている。

「この間、そう言われて、肩叩いたら、もっとびつくりしましたよね」

ひとしきり笑った俺は、突っ込みを入れた。

「こんな暗闇の中、一人で待つ女の子の身になって考えて」

「風邪引くから、先に帰ってくださいって、いっつも頼んでるのに」

「だって達吉くんが練習してるのに帰ったら、なんだか卑怯じゃない。マネージャーとして」

「今まで十分すぎるほど、付き合ってくれますよ」

口ではこう言うが、本当は、律儀に練習の上がりを待っていてくれるのが、嬉しくて仕方なかった。

「そんなことはいいいから、早く帰ろつよ。本当に風邪ひいちゃう」
マフラーを巻き直した真木さんが、ベンチから飛び降りた。ちょうど降りた所に縁石があり、そのまま転びそうになった真木さんの腕を咄嗟に引いた。

「ありがとう」

真木さんが、照れ笑いした。支えがなくなつたところで離し、駐輪場に向かった。

俺は、自分の自転車を引っ張り出して、真木さんのほうを見た。このごろは、途中まで真木さんと一緒に帰ることが多い。その真木さんは、「あれー」「おかしいな」と言いながら、自転車を漁っている。

「鍵かけ忘れた。やられたかも。休みだからって油断した。先帰っていいよ、達吉くん」

神妙な顔でそう呟いた真木さんは、俺の自転車に荷台がついていないのを、知っている。

俺は自転車に乗らず、そのまま歩き始めた。

「送っていきます。こんなに遅くなつたのは俺が練習してたせいなので」

「え、いいよ、自分で帰れるよ」

「痴漢多発注意の看板、見なかったんですか？　ここら辺、寂れるから、歩きで帰ったりしたら被害に遭うかもしれないよ」

「う……痴漢は、怖いなあ。痴漢ってどういう格好してるんだろ。全裸でクラウチングスタートの構えしてて、私を見つけた瞬間にこっちに向かって走り出したりするのかな。そんなの見たら、お腹がよじれて元に戻らなくなるかも」

「真木さんのお腹の心配はしてません。心配してるのは被害に遭うことです。とにかく、家まで送ります」

俺は真木さんの言う痴漢を想像してしまい、笑いながら、念を押

した。

歩道のない道路を、真木さんが先に歩き、俺が後ろを歩いた。自転車の駐輪証明ステッカーが、後ろから走ってくる車へ俺たちの存在を知らせる、反射板の役割を果たす。

「そういえば昼休憩のときに言いそびれたんですけど、俺、神西との練習試合で投げるようになりました」

「うそ！」

前を歩いていた真木さんが、俺を見た。彼女はそのまま後ろ向きで歩く。

「ホントです。松林と桂も了解済みだそうです。俺、てつきり、真木さんが提案してくれたのかと思ってたんですけど」

「しないしないしない。他校の監督さんに、そこまでは言えないよ。でもやったじゃん！ 一年半ぶりの試合！」

真木さんが跳びはねんばかりの勢いで言葉を続ける。

「しかもあの神西と！ 因縁だね。燃えるね！ 絶対見に行くからね！ いつ？ どこで？」

「三月十三日の午前十時から、多野のグラウンドで」

「わかった。絶対、行くから。朝、念のため、メールして！」

前を向いた真木さんは、神西との試合の事ばかり考えて始めているんだろう。俺はというと、ああ、本当にこの人のこと、大好きだなあ、と野球とは全く関係ないことを思って自転車を押していた。

これまでの部活や、今月末に開幕するプロ野球の話、真木さんの新生活の話などをしているうちに、あっという間に時間は過ぎた。

真木さんが住んでいる家の前で、俺は、足を止めた。

「じゃあ、また、試合の日に」

「あ、達吉くん」

真木さんが家に入るまで見送ろう、と思って突っ立っていると、門に手をかけた真木さんが、思い出したように振り返った。

「ありがとね。送ってくれて。あと……今までも、いろいろ」

今年の卒業式は、三月六日。卒業を三日後に控えていることを意

識して、だろう。真木さんは小さな声で、呟いた。真木さんも、寂しそうにしてくれる。それだけで俺は十分だった。それにまだ、試合が残っている。

「俺も、感謝してもしきれないです。真木さんは、本当、一生懸命、マネージャーをやってくれて……俺、真木さんがいたから、腐らずに、練習ができたんです」

真木さんは家の玄関と俺とを見比べ、門から手を離した。そして隣家のモルタルづくりの塀に寄りかかった。いつもの真木さんから想像もつかない、憂いと寂寥を帯びた表情を、月明かりと街灯が照らす。

「私、もともと、野球部のマネージャーなんて、やるつもりなかったの。ソフト部の強豪か、軟式野球がある高校に入って、選手として、やるつもりだった。中学まで、男子に混じって、野球部に入ってたし」

「前にも、そんなこと言っていましたね」

「けど、中二の夏に、アキレス腱やって。そこからはもう駄目。膝の前十字靱帯とか、ふくらはぎの肉離れとか、またアキレス腱とか何もそこまで、っていうくらい、徹底的に足だけ怪我してね。医者から、これ以上怪我をすれば日常生活に支障が出る、たとえば、足を引きずらないと歩けないようになるかもしれない。そう言われていつもは怒ってばかりの親が、私に、泣いて頼むの。もう野球はやめてくれ。運動部はやめてくれって」

真木さんは、背中の後ろで手を組んだ。

「悔しかったなあ。下手くそでもいいから、やっぱり、自分で、ボールに触れていたかった。何もかも、やる気がなくて、毎日、辛くて。でも、どうにか受験は頑張って、この高校に入ったら、真悟がいた。『マネージャーいないから、やってくれない?』って。人の気も知らないで、って怒ったよ。けど、しつこく誘われて、折れて。情性で一年やってたら、達吉くんが、入ってきた。いきなり真悟よりも速い球を投げ込んだ時は、びっくりした。なんでうちの高

校にこんなのが来たんだろう？ 達吉くんは知らないだろうけど、よく、部員の間では話題になってたよ」

「俺ぐらいの球を放る人間なら、いくらでもいると思います」

中学までは硬球を扱うボーイズクラブに入っていたが、親が離婚して、ごたごたしてるときに、辞めた。部活は何かと金がかかるし、高校では野球をやらないつもりだった。母親が応援してくれたので、結局、入ることにしたが。

「謙遜しないでいいよ。達吉くんに刺激されて、真悟以外の部員も、みんな、真面目にやるようになったんだから。私も、達吉くんに会って初めて、マネージャーとしてのやりがいみたいなものを感じたな」

でも、と真木さんが区切った。

「夏くらいからかな。達吉くんと打ち解けて話せるようになってから……毎日、後悔してた。マネージャーに、なったこと」

真木さんは塀から背を離れた。玄関に向けて歩き出し、表情が見えなくなった。

「この家から通うのは、今までと同じ。でも、卒業で、みんな、一人暮らしを始めたりにして、ばらばらになって。ただでさえ、不安でなのに、達吉くんとも離れなきゃいけない……。上手くやっていける自信、ない」

真木さんは、門を開けて閉め、玄関の扉に手をかけた。俺は思うように応えられず、黙って、見送った。

予報は晴れのち曇り。

卒業式を無事に終えた真木さんは、俺のお祝いのメールにも、いつも通り返信してくれた。そして今日の練習試合にも来てくれた。十日前のことなんて、何も、なかったかのよう。

「一年の時からとにかく走り込んできたから問題ないだろうけど、試合のスタミナと練習のスタミナは違うからね。達吉くんは試合経

験が圧倒的に足りないから、飛ばし過ぎないように気をつけて」

「はい」

試合は、一年夏の神西戦以来。俺は真木さんのアドバイスを頭に叩き込んで、試合前の投球練習をこなした。

神西のメンバーは、遠征用のバスから降りて多野のグラウンドに入る前に、一礼した。きつと、俺が一年の夏に対戦したときのバッターは、一人もいない。神西は、一年と二年だけで部員が四十人を超える大所帯で、秋ならともかく、夏に、一年生がスタメンを張るようなことは、滅多にないからだ。

俺のいる浦部第一が、二十二対一で負けた年の神西は、県ベスト16止まりだった。けれど、今回の遠征メンバーは、夏にベスト4を経験した人間も多く残っていて、秋も、県ベスト4だ。

俺は密かに、この練習試合を、進路の目安にしようとしていた。

この試合が、高校生活最後の、強豪校との試合になるかもしれないからだ。

いくら神西が強いと言っても、練習試合でコールド負けのスコアまで打ち込まれるようなら、レベルの高い大学リーグでは通用しないだろう。だから、打ち込まれたら予定通りに就職する。上手く抑えられたら、大学への進学も、視野に入れる。

神西が練習を終えると、お互いにベース付近に集まって、挨拶した。主審、一塁塁審、一塁線審は、多野の控えのメンバーが行う。二、三塁塁審、三塁線審は、神西の控えのメンバー。挨拶のあと、お互いのキャプテン、里美と脇屋が、じゃんけんで先攻と後攻を決めた。先攻は多野、後攻は神西になった。

多野のグラウンドに場内アナウンスの設備はない。主審に呼ばれ、ネクストバッターズサークルにいた一番、ショートの北島が、自分の金属バットを手に持ち、右バッターボックスに入った。真木さんの情報によれば、神西の先発、河合は、最速が百四十キロ台後半の、本格派右腕。変化球は、鋭く滑りながら落ちるスライダーと、

打者のタイミングを外す大きなカーブ。たまに、ストレートをわざとシュート気味に放ることもあるらしい。

北島は初球、インコースへシュート気味に食い込んできたストレートをバットの根元に引っかけ、ピッチャー前にぽとりと落ちるゴロを打った。一塁までしつかりと全力疾走したが、余裕をもってアウト。北島は一塁をオーバーランし、ベンチに戻る前に、顔をしかめて右手を振った。その後の二人は一塁へのファールフライ、空振り三振。あっさりと攻守が変わった。

スパイクの紐をきつく縛り直し、マウンドに向かおうとすると、音が出るほど強く、背中を叩かれた。守備に向かおうとしていたベンチ内の選手たちが、一斉に俺の後ろを見た。つられて俺も見る。マネージャーの補助としてベンチ入りを許された真木さんは、何も言わずに微笑んだ。俺も何も言わず、帽子のつばに手を当ててからマウンドへ走った。俺の帽子は、つばの地の色が緑で、額は白地になっている。額には緑の刺繍で、アルファベットのU、その真ん中を縦に貫く数字の1が描いてある。飾り気のない白の無地で統一されたユニフォームの胸の辺りには、緑色で刺繍された『浦部第一』という漢字が入っている。

各回の頭には、自由に放つてもいい球が三球、与えられている。俺はピッチャープレートを踏み、振りかぶり、投げた。ボールは、主審の頭上はるか、バックネットにぶち当たった。俺はにやけそうになるのを必死に堪えた。一年半ぶりの、真剣勝負。

残りの二球ともすつぽ抜けて、キャッチャーの里美が不安げに俺を見る。俺はもちろん、不安を抱いてはいない。これは、俺と真木さんにしか分らない、儀式みたいなものだから。俺は尻ポケットに入れたロジンバッグを左手で触り、指先についた粉を息で吹き飛ばした。

一番打者が、左バッターボックスに入った。去年の夏ベスト4も経験している、新チームのキャプテン、脇屋。サインは外角低めの直球。頷き、投げる。脇屋は見逃し、主審の右手が拳がった。投球

練習のすつば抜けた球を見てか、余裕のあった脇屋の表情が、引き締まった。次からが本当の勝負。次の要求は同じコースから外へ落ちるスライダー。少しボール気味になってしまい、脇屋はあっさりと目を切った。俺の投げるスライダーには、ボール球を振らせるほどのキレはない。三球目はインコースを挟むストレート。ボールでもいい見せ球のはずが、打てるところにいつてしまった。グローブを出す間もなく、顔のすぐ左横を、ボールが飛んでいった。センタ―前ヒット。今までに見たこともないスイングスピードだった。

続く二番、左打者の木元は、バントの構えをした。まずはアウトが欲しい。バントをさせない配球を組み立てていた里美のサインに、首を振る。里美もそれを察し、次のサインでは意を汲んでくれた。頷く。バントするにはちょうどいい、遅めのストレートを、インコース高めに放った。

しかし木元は、バントの構えを解き、ヒッティング。打球は三遊間に飛んだ。抜けるかと思ったが、北島が左手を伸ばして、かろうじて捕球した。しかしヒットエンドランのサインが出ていたらしく、二塁は間に合わない。北島は逆シングルの無茶な態勢から、強引に一塁へ送球した。何やってんだよ、逸れたら三塁まで行くぞ、と思いつながら一塁を振り返ると、その送球はショートバウンドとなって見事に木元を刺した。

ワンナウト、二塁。ワンナウトも取れずに五点を失った、一年の夏が脳裏によぎった。今日は、取れた。

俺は拍手代わりに、グラブを三度叩いた。

「ワンナウトー！」

ファイブプレーをした北島が、一際大きな声を出す。サイン交換のあと、二塁塁上の脇屋のリードを横目で確認し、セツトポジションから、ストレートを放った。右打者の内角低め、ベースぎりぎりに決まった。今日一番のキャッチング音だった。三番で投手の河合が不満そうに主審を見た。あのコースにビシッと決まると、なんともいえない快感が体突き抜ける。気持ち試し合に入

り込んでいく音だ。俺はテンポよく次の球を放った。さつきよりは少し甘い、またインコースにストレートが決まった。そして間髪いれずに放った三球目は外角低めのストレート。完全に振り遅れの、空振り三振に仕留めた。

ロジンバッグを触り、四番の右打者、後藤と対峙する。今日のオーダーでは、一、四、五、六、七、九番打者が、夏ベスト4の時、既にスタメンを張っていた。打順が下がっていくとはいえ、油断をすればひとたまりもない。里美の要求はアウトコースの真ん中あたりから、ストライクゾーンへと落ちるカーブ。しかしこれは、アウトコースを意識しすぎて、ボールになった。後藤は微動だにしない。次はストライクを取りに行ったスライダー。しかしそれも真ん中低めに大きく外れた。後藤はまた、身じろぎもしない。ストレートを狙っているんだろうか。ボールが先行しての三球目のサインは、俺の得意なインコースへのストレート。

一発もある後藤の、狙い球かもしれない。ここでストライクを取れないとランナーを溜めてしまう。そういったことを考えてしまい、慎重さが災いしてうまく腕が振れなかった。置きにいった棒球が、インコースの甘い所に吸い込まれていった。

金属バットとボールがこすれ合う音が耳に微かに届いた。ライナー性の速い打球が、防護ネットで作ったホームランゾーンを、あっという間に超えた。ツーランホームラン。

あっさりと、二点を取られた。俺は後藤がダイヤモンドを回る間、ずっと、地面と睨み合いをした。

そして審判が得点をコールすると、ひとつ、息を吐いて顔を上げた。弱気になると、やられる。学習した俺は、徹底したインコース攻めで、五番打者を打ち取った。

二回表の攻撃もあっさりと終わってしまった。けれど、県内屈指の剛腕、河合の前では予想の範囲内だ。いちいち落胆はしない。

一回裏で、やれるという自信を掴んだ俺は、人より恵まれた手の長さを存分に生かし、角度のある球を放っていく。後藤に打たれた

後から制球が安定して、ストライクが面白いように取れた。厳しいコースへの速球を中心にストライクを先行させた後、ボールゾーンに落ちるチェンジアップを織り交ぜると、さすがの神西の打者も打ちにくいようで、凡退が増えていった。

それから俺は、神西打線を相手に七回の裏までゼロを刻ませた。打順が回ってくる八回表の攻撃に備えて、バッティンググローブを手にはめつつ、横目でスコアボードを眺める。一回裏に二点が入って以降は、お互いにゼロ、ゼロ、ゼロ、ゼロ。俺は、夢でも見ているような心地で、多野の女子マネージャーが紙コップに注いでくれた温かいお茶をすすった。半分ほど飲んで、席を立つ。紙コップをパイプ椅子へ置き、ベンチの端にある、傘立てのような粗末な収納場所から、自分のバットを引き抜いた。

多野の六番、サードの紀藤が、右打席に入った。俺はヘルメットを被り、石灰で円を描いたネクストバッタースークルにしゃがんだ。河合は、疲れた様子もなく、淡々と一球目を投げた。しかし、あまりにも淡々と投げ過ぎたのか、これまでヒットを打たれていないことで油断したのか。極甘のスライダーがど真ん中に入ってきた。これまで二つの三振に終わっていた紀藤は、あまりの絶好球に興奮したのか、スライダーを待ち切れずに早いタイミングでボールを叩いた。しかし多少のタイミングのズレも帳消しにするような甘さのボールは、ライン際をきちんと締めていなかったサードの右手側を抜いた。神西のレフト、木元の、素早いクッションボールの処理と返球はさすがだったが、それでも間に合わず、紀藤は悠々と二塁を陥れた。

七番打者の俺は、左バッターボックスへ向かう。河合にとっては今日初めての、セットポジションからの投球。河合はマウンドの土を足で入念に固めたり、帽子を被り直したりして、少し落ち着かない。俺は足元を軽く固めてから、監督を見た。サインは送りバント。ヘルメットのつばに手を当て、バントの構えをする。バントの練習

もちろんしているが、高校になってからは一度も試合でやったことがない。その上、難しい三塁へのバント。否応なしに鼓動が高鳴った。

初球。三塁線にボールを転がそうと出したバットに、ボールは当たってくれなかった。ボールゾーンだったが、引つ込めるのが間に合わず、スイングを取られ、ワンストライク。次のサインもバントだった。俺は同じように腰を屈めた。今度は当てられる場所にボールが来て、当てた。しかしボールは、ライナーとなって浮き上がり、一塁側の神西ベンチの前に落ちた。ツーナッシング。追い込まれたことに小さな罪悪感を覚えつつ、監督を見た。

少し呆れ顔で、打て、のサインが出された。俺は心の中で謝り、二度ほど素振りした後で、打席に入り直す。バント失敗を取り返さなければと、気負うと失敗する。いつものように、甘い球が来るまで粘る打ち方でいい。目を閉じ、開く。肩の力を抜いた。

左足を軸に、バッターボックスの後方に立った。位置は、ホームプレート側のラインのぎりぎり。インコースをさばく自信があるからの打法でもあるが、相手が人間なら、投手への内角球は多かれ少なかれ気を遣うことを考えての打ち方でもある。脇を締め、右足の爪先を地面に押し付ける。右足のかかとを微細にゆらしてタイミングを計る。

ボール球は見極め、見極めが難しい所に入ってきたらカットで逃げる。甘い球は打つ。このカウントでは、変に配球を読むよりも、今までの練習が、基本に忠実な反応を促してくれることを、信じるしかない。

球が、河合の右手から吐き出された。全体の動きがほんの少し緩い。前打席までの感覚では、ストレートよりも振りが少し緩いのがカーブ、振りがほんの少し緩いのがスライダーだ。ボールカウントなしでのスライダーなら、絶対にストライクゾーンには投げない。バットを動かさずに、見送った。

「ボオッ」

キャッチャーは、地面についたボールを擦って土を落としている。スライダーが曲がり過ぎて地面についてしまったらしい。曲がり過ぎて地面につくことを警戒しないとならないなんて、俺のスライダーの変化やキレからすれば羨ましい限りだ。

テンポのいい河合に引きずられないよう、すぐに構えた。次の球が来る。今度は腕の振りが少し緩い。右打者にとっては、のけぞりたくなるほど肩口から入ってくる、昔のピッチャーがよく使っていたカーブ。しかしまだインコースを攻められていない、左打者の俺にとっては、そこまで怖さがない。振り抜く。打った瞬間にバットを放って走り出したが、打球は一塁コーチャーの足元を抜けて行くファウルだった。

バットを拾い、仕切り直し。こうなれば、配球は読める。インコース低めへのストレートだ。ここでそこへのストレートを一球使っておかなければ、カーブのブレーキ感と、スライダーの変化量は十分に生かせない。俺を追い込んでからの二球で、そのことに気付いたはずだ。ヤマが外れても、コース違いのストレートなら、カットで逃げられる。変化球も同じ。リリースの違いが隠しきれていないから、かろうじて当てられる可能性が高い。

絶対に、インコースのストレートしかない。俺はホームプレートに被さるぐらい、寄った。来い、インコース。七回表、ノーアウト二塁、最初で最後かもしれない、絶好のチャンス。ベンチは声を張り上げている。しかし、言葉が意味を伴って、耳に届かない。

河合が投球モーションを終えようとした瞬間、俺は足のステップを使って、内角打ちの態勢に切り替えた。河合が気付いたようだがもう遅い。ボールは手から離れてしまった。

快音。絶好の感触。駆け出し、バットを放る。打球はやや前進準備だったライトの上を軽々と超え、長打コースになった。

全力疾走で一塁を蹴る。

特別校舎の裏で、ベースランニングの真似ごとに、真剣に取り組んだ日々。あれは、無駄なんかじゃなかった。何度も繰り返し足に

刻み込んだ成果が軽やかに足を運ぶ。二塁を蹴る前に、三塁コーチャーを見る。手をめいっばい広げ、俺を呼び込んでいる。彼は手を横に払っていた。スライディングをしるとのジェスチャーだ。

速度を落とさず三塁目掛けて突っ込んだ。滑り込む。足がベースについたと同時に、サードのグラブがヘルメットを思い切り叩いた。いてえ、と思いながら、後ろ手について審判を見上げる。

「セーフ！ セーフ！」

神西の控え選手が、二度、大きく手を横に広げた。

「じゃあ！」

これで一点差だ。俺は荒い息を吐き出しながら、ベースに足を載せて立ち上がり、三塁ベンチに向かって大きく拳を突き上げた。砂埃が目に入って、ベンチの様子は良く見えない。けれど、声からして、盛り上がっているのは確かなようだった。

審判に向け、両手でアルファベットのTの形を作ってタイムを要求し、左腕にあてていたレガースを外す。それを三塁コーチャーに渡した。

「ナイバッチです」

三塁コーチャーが、嬉しそうに口もとを緩めた。俺も軽く笑んで返す。

ずれたヘルメットを直し、三塁塁上から河合を見ると、目の色が変わっていた。フォアボールのランナーを二人出しただけで、ヒットのランナーは出さず、ノーヒッターペースで抑えて上機嫌だった所を、打たれた。しかも、夏にコールドで破ったチームの、下位打線に。真木さんによれば、負けん気を真っ向から表現するタイプということらしい河合は、憎しみにも似た目を、次のバッター、八番キャッチャーの里美へ注いでいる。

形だけ見れば、ノーアウト三塁。放っておいても一点は入りそうな場面だ。俺のように、感情を出さずに投げ込む投手が、苛立ちを顔に出したのならば、一気呵成に打ち崩すチャンスでもある。無駄にアウトカウントを稼がせてやる必要はない。だが河合のような投

手は逆だ。気持ちが入り込めば入り込むほどいい球を放る。そう思
ってベンチを見ると、俺に向けて、サインが出ていた。監督も、俺
と同じ思いだったらいい。俺は了解のサインを返し、河合が投球動
作に入るのを待った。

河合が何度も首を横に振る。そして五回目のサイン交換でようや
く頷き、俺を、目で牽制した。そしてセットポジションから、初球。
俺は地面を蹴った。これまでで一番の剛球に見えたそれは、ストラ
イクゾーンに入った。里美がヒッティングからバントの構えに切り
替え、かろうじて当てる。マウンドを下りるピッチャーと、駆け出
したファーストと、その場に留まるキャッチャーのちょうど中間点
に、ボールが飛んだ。俺はホームにがちり待ち構えるキャッチャ
ーの股を抜き、足をホームプレートに差し入れる。そのあと、左肩
にグラブが当てられた。左足全体に、筋が伸びるような、小さな痛
みが走った。

「セーフ！」

けれど、主審が、三塁打のときと同じように両手で素早く空を切
っているのを見て、そんな痛みはすぐに消えた。立ち上がり、三塁
ベンチに向かって駆け出す。ベンチで出迎える選手とハイタッチを
交わし、最後に待っていた、笑顔の真木さんとハイタッチをして、
手を絡ませ合った。

「すごいよ、達吉くん！ 本当にすごい！」

真木さんは本当にうれしそうに、俺の左手を両手で包み、称えて
くれた。試合の途中、まだ同点に追いついただけなのに、嬉しすぎ
てどうしようかと思った。俺は真木さんの手をしっかりと握り返し
た。俺の手だけが汗ばんでいたのか、真木さんの手も汗ばんでいた
のか。その感触に、名残惜しさを感じながらも手を外し、ベンチの
自分の席へ戻った。

興奮がだんだんと冷めてくると、ベースを全速力で走り回った疲
れが、少しだけ足に来た。バッターを見るともう、三球三振で仕留
められていた。河合はスイッチが入ってしまったらしい。俺はろく

に休めないまま、ベンチから出て、控えの選手とキャッチボールを始めた。そして一番の北島がアウトコースのスライダーを振らされて三振に倒れたのを確認し、そのままマウンドに走った。

表の攻撃では、はしゃぎすぎたが、ベース間の全力疾走くらいで投球に支障をきたすほど、ぬるい走り込みはしてきていない。俺と里美は今まで散々内角を突いてきた”貯金”を利用し、徹底してボールをアウトコースに集めた。そして六番から始まった打線を三者凡退に仕留めることに成功した。

二対二の同点。練習試合だから、延長戦はない。多野が勝つには九回表の攻撃で一点を勝ち越すしかなかったが、情け容赦ない河合の投球術に翻弄され、あつという間に三者凡退に終わった。

多野の勝ちがなくなったのをベンチから見届けた俺は、放置していて冷めてしまったお茶を口に運び、紙コップをゴミ袋へ放った。グラブを掴み、ベンチを出る。その際、軸足の左足に、痛みが走った。ぴんと張り詰めるような、痛み。

しかし些細なものだったので気にせず、マウンドに上った。投球練習を済ませ、軽い屈伸運動。そこでも、左足に痛みがあった。なんだか、突っ張るというか……嫌な、痛みだ。スクイズで、ベースに滑り込んだ時から、のような気がする。どうして今日に限って。

「あとアウトみつっ！」

「同点で終わろー！」

「落ち着いて放れよ！」

内野陣から、外野陣から、ベンチから、様々な声が飛んでくる。そうだ。

俺は今、マウンドにいる。この一年半、どれだけ願っても、立てなかった、試合のマウンドに。

相手にとっては練習試合でも、俺にとっては、真剣勝負だ。大学で野球を続けるか、そのまま就職するか。判断基準にするための、大事な、試合。少しくらいの痛みなんて、気にしていられない。

九番の川原が立つ左バッターボックスに、目を向けた。左足の爪

先で、マウンドの、硬い土を叩いた。大丈夫、やれる。

サインに頷き、両手を頭上に掲げ、左足だけで立ち、右膝を腰よりも高く上げる。重心をかけた左足が、また、痛んだ。その痛みが感覚を狂わせ、狙ったアウトコースとは間逆の、インコースへ、ストレートがいった。バッターがくの字に腰を曲げて、ボールを避けた。里美は慌ててミットを動かし、どうにか捕球した。

俺は、バッターがベンチへ目を向けた隙に、軽く手を上げて謝意を示した。

……なんだ、この感覚？

次の球も、その次の球も、狙った所にいかない。一球、一球、投げるたび、痛みが増していく。立ってられないほどではないが、地面に足をつくと痺れるような痛みが走る。

「フォアボール！」

結局、一球もストライクが入らないまま、九番打者の川原を歩かせてしまった。

次のバッターは、初回に、尋常でないスイングスピードを見せてくれた、キャプテンの脇屋だ。甘い所に行くと言われる。

俺は、深呼吸しようとして、自分が肩で息をしていることに気付いた。

おかしくなったのは、足が痛みだしてからだ。八回までは、なんともなかったのに。

顔に出さないよう、平静を装って、セットポジションに入る。しかし、脇屋の鋭い視線と目がかち合い、嫌な空気を感じた。プレートから足を外し、一塁に牽制するふりをした。右袖で汗を拭きながら帽子を被り直し、また、サインの確認をする。

八回までは次の球を早く投げたい一心でテンポよく放っていたけれど、今は少しでも休む時間が欲しい。だが間が空きすぎると、相手に異変を悟られる。俺は無理やり振りかぶった。しかし、左足がまっすぐ伸びてくれず、投球フォームを制御できないまま、ボールが手もとから離れた。それはバッターの後ろを通るとんでもない大

暴投になった。一塁ランナーの川原が次の塁に進む。俺はマウンドから降りて、里美の近くまでボールを受け取りに行ったが、そのときにも、左足は違和感の主張をやめない。

ボールを受け取ってマウンドに戻ると、監督が、タイムを取った。内野陣が集まってくる。里美が、グラブで俺の太もを軽く叩いたあと、グラブを口にあてた。俺もグラブを口にあてる。

「どうした？ どっか痛めたのか？」

「疲れが足にきてる。俺、試合経験少ないから、消耗が早いのかも」
「けど、八回まではスタミナ切れの雰囲気もなかった。スツと投げたじゃないか」

ベンチから、伝令の一年生が走ってきた。練習試合でも、グラウンドに入る際に、きっちり一礼した。

「監督が、左足痛めたのか、聞いてこいということです。痛めたなら、無理をしないで桂と代われということです」

「痛めてない。大丈夫。監督にそう伝えてくれ」

「浦部第一のマネージャーさんも、屈伸するときと、左足に体重をかけたとき、顔をしかめていたって、言っていましたよ」

「大丈夫。真木さんは大げさなだけだから」

「おい、練習試合だぞ。確かに神西と引き分けたら自信になるけど……怪我してまでやることねえよ」

「大丈夫だって言ってるんだろ！」

俺は思わず、大きな声を出した。内野陣全員が、驚いた様子で俺を見つめる。伝令の一年生選手は、冷静に、言葉を繋いだ。

「とにかく、一旦ベンチに下がりました。少しくらい待たせても、平気です」

「分かった」

俺は大丈夫だということをアピールするため、走ってベンチに戻った。ノーアウト二塁、一点入ればサヨナラ負け、バッターは脇屋という絶体絶命の場面で、マウンドを譲るわけにはいかない。

ベンチの手前に、真木さんが立っていた。俺を睨むようにして。

「大丈夫ですよ、ほら、走ってここまでこれたんですから」

しかし真木さんは、俺の左足を指差した。

「今、左足、引きずってたよ。気付かなかった？」

「え」

見ると、無意識に、左足のかかとが地面につくの避けていた。

無理につこうとしたら、明らかにおかしい、今までに感じたことのない、張りがあった。

「交代、お願いします」

真木さんは、監督に、そう告げた。監督が、ベンチを出て、主審役の選手に、交代を告げに行こうとする。

「待ってください。あと三つです。あと、三つで、神西に！」

俺は食い下がった。

一年半、必死に耐え続けた成果が、勝利とはいかなくても、引き分け、県ベスト4のチームとの引き分けという結果に終わろうとしている。しかも、一年の夏に、観客席の人間にゴミ扱いされた試合の相手に、自分の打点つきで。引き分けに終われば、大学でやっていける自信もつく。でも、ここで降板したら、ここで負けたら。

「駄目」

「何で、どうしてですか！ 何の権利があつて、そんな！」

「たかが練習試合で、後輩の大事な身体に怪我をさせるわけにはいかない。今、達吉くんが感じているのが、痺れるような痛み、張るような痛みなら、それは、肉離れの一步手前。前兆に気付けた分だけ、達吉くんはついてるよ。気付かないで、突然、肉離れになってもおかしくないんだから」

真木さんは、背を向け、ベンチに戻った。

「それでも降板したくないなら、私がマネージャーになった理由、思い出して」

結局、試合は、サヨナラ負けだった。控えの桂が、俺と交代して

すぐ、脇屋を敬遠し、神西の二番打者、木元に、右中間へのヒットを打たれた。

俺は、左ふくらはぎのアイシングをいったん中断し、片足跳びで試合後の整列に加わった。里美と脇屋、キャプテン同士の号令でお互いに礼をした。

「浦部第一つて、秋、出てましたっけ。長谷川くんみたいなのがいたら、話題になってたと思うんすけど」

さつさとベンチに戻ろうとしていると、神西のピッチャー、河合に、声をかけられた。

「人数がいなくて廃部になったんです。人数が集まれば、来月、部を作り直すつもりです」

「一年の夏に、俺らと当たりましたよね？ 初めてベンチ入りした試合だったから、覚えてるんすよ。あの時とはえらい違いでしたよ。俺、次は絶対、打たれるつもりないんで。夏、また、やりましょう」

「そうなるといいっすね。次までに、俺も、もっと練習しますよ」
そう応え、俺はまた、片足跳びでベンチに向かった。河合の、直球が変化球かで差が出る投球モーションについては、あえて指摘しなかった。夏までに、部を再興でき、試合に必要な人数を集める事ができ、河合のモーションの癖がそのまま、しかも神西と、公式戦で、当たる。そんな可能性は、限りなくゼロに近い。けど、ゼロじゃない。

途中で、真木さんが近づいて来て、肩を貸してくれた。真木さんの首を抱きかかえるような格好になった。真木さんは、制服の上から、スポーツ用のウィンドブレーカーを羽織っているんで、肌の接触はない。それでも俺は、真木さんのほうを、頑なに見ないようにして、ベンチに座らせてもらった。

手の空いている部員は全員、試合の後片付けに奔走していて、今のベンチには誰もいない。試合が終わって、熱が引いていくと、真冬のような寒さが肌に沁みた。今年の三月は、やっぱり、冬だ。真木さんは手をカイ口とすり合わせながら、俺のすぐ左隣に座った。

そしてポケットからもう一つのカイロを取り出し、俺に、手渡してくれた。俺は礼を言い、一旦、カイロを脇に置いた。ふくらはぎにアイシングを施し直すためだ。うまくサポーターを巻けずに手こずっている、見かねた真木さんが、俺の足もとにしゃがんだ。ユニフォームをまくりあげているので、真木さんの髪が、膝に直接かかった。くすぐりたい。冷たい手も、ふくらはぎに触れている。俺がそんなことに気を取られている間に、真木さんは、しっかりと処置を終わらせた。

「言うこと聞いてくれて、ありがとう」

真木さんは俺の左隣にもう一度座り直した。そして自分の足もとを見ながら、小さな声で、言った。

「いえ。俺の方こそ、わがまま言っ、て、すいませんでした。嫌なことも、言わせてしまっ、て」

「どうして、最初は、拒んだの？ 自分で、この痛みはまずいとか、思わなかった？ いくら相手が神西だからって、達吉くんは変なプライドで冷静さを失うような人じゃないでしょ？」

俺は、カイロを手にとった。ついさっきまで真木さんが使っていたのか、温かい。

「俺、自分で自分に、賭けてたんです。今度の試合、神西を上手く抑えたら大学の主要リーグを狙う。逆に、点差をつけられたら就職そんな風に。で、上手く抑えたら、欲が出てきて。大学で通用する確信が欲しくて。続投、したかったんです」

「達吉くん、就職も考えてるんだ」

「というか、就職しか考えてなかったんです。つい最近まで。けど、真木さんが、強豪校に行くって言うから」

「私？」

無防備な、疑問形。

卒業したら、道がそれぞれ分かれて、真木さんも、俺のことなんか忘れて、大学生活を楽しむんだろう。俺は、そう感じてきた。きたからこそ、いつも、閉じ込めてきた言葉が、あった。別れを寂し

いと思ってくれるだけで充分だと、感じてきた。気持ちを伝えたと
して、受け容れられなくても、相手も同じように想ってくれていて
も、どちらにしても、悲しくなるだけだから。

だがこの前の……十日前の言葉が、頭から離れない。県外の大学
に通う真木さんは、簡単には会えない場所で一人暮らしを始めるの
だと、勝手に勘違いしていた。だけど、家から通う、と十日前の真
木さんは言った。

それなら少しは、繋がりを残せる可能性があるんじゃないか。そ
う思うと、駄目だった。

「俺、真木さんと、もつと一緒に、野球をやりたいです。離れたく
ないです」

真木さんの顔が、少し、赤くなった。

「ん？　どういう、意味？」

「真木さん、このあいだ、自宅から通うって、言いましたよね？」

「そう、だけど。ずいぶん前に、言わなかった？」

言ってませんよ、と不機嫌な声を出しそうになったが、堪えた。

入江先輩のことと同じように、きちんと確認もせず勘違いしていた
のは、俺自身のせいだ。

「来てくれませんか、これから。教えてくれましたよね。みんな
と離れて、やっていく自信がないって。だったら、来年も、一緒に
やりましょうよ。俺は、来年も、この街で暮らしますから。本当
に、暇で暇で仕方なくなったらでいいんで、練習、見に来て下さい。
真木さんがいないと、俺、頑張れないです」

「頑張れない？　私がいらないと？」

「はい」

「待つて待つて待つて」

真木さんは、少し整理する時間が欲しいというように、手のひら
を俺へ向けた。

しばらくその体勢で固まってから、手を下ろして、俺のほうを見
た。真木さんの頬は、なんだか火照っているようだった。

「あ。里美くん、が」

真木さんは、何かを言おうとしてやめ、その言葉を代わりに発した。真木さんの視線を追って振り返ると、ベンチ内の椅子の隅に、ペットボトルに入ったミネラルウォーターを飲み下している里美が座っていた。足元には、ファスナーの開いた、部活用の大きなバッグがある。

「里美。いつから、いた？」

「水、飲みにきただけ。心配すんなよ、冷やかしたりしねえから。お前はとにかく、足を心配してればいい」

里美は飲み干したペットボトルを放って、ベンチを後にした。

聞かれたのが里美でよかった。安堵の溜息を吐き、真木さんをもう一度、見た。

「私も、手伝ってくる」

間が空いたせいで、真木さんは、頬の火照りも収まったらしく、いつもの様子に戻っていた。立ち上がり、カイロを握り締め、ベンチの外へと歩いて行く。

「さっきの話。いいよ。練習も、見に来てあげる」

真木さんが、途中で、立ち止まった。帰ってきてから続きを話そう、と思っていた俺は、急に振り向いた真木さんに、不意をつかれた。

「けど、練習っていう理由がないと、会えない？」

「りっ、理由なんて、どうでもいいです！ これからも会えれば、それで」

俺の言葉を聞いた真木さんの口元に浮かんだのは、これまでよく見た苦笑でもなく、普段の楽しげな笑みでもなく。触れると壊れてしまいそうな、それでいて慈愛に満ちているような、不思議な笑みだった。

それから真木さんは、両手をウィンドブレーカーのポケットに突っ込み、灰色のスカートをなびかせながら、軽い足取りで片付けに向かった。

俺は、数瞬前の真木さんが零した、こわく 蠱惑的な微笑に惹きつけられ、
その背中からしばらく、目が離せなかった。

(2 0 1 1 / 4 / 1 9)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4502s/>

ひととせ

2011年4月20日16時25分発行